



第4章

帯広の森を舞台として

§1 森と子どもたち

森の少年隊創設

◎設立への準備期

「帯広の森」造成事業の開始に伴い、事業をより一層特色のある市民の活動の場とするため、将来「帯広の森」を有効に活用できる市民団体を作ろうとする計画が市の企画課を中心に発想されました。

その計画を受け、昭和51年度に市の社会教育指導室は、次代を担う青少年が森作りを通じて自然に親しみ、健康な肉体と健全な人格を形成することを目的とした小学生の団体を作ろうと各方面に働きかけ、昭和52年5月に「森の少年隊」が設立されました。

○創設準備委員（創設後育成会へ移行）

氏名（敬称略）	所属
山 田 勇 雄	東北北海道木材協会
林 克 己	帯広の森市民協議会
曾 根 博	曾根建設工業株式会社
大和田 宏	柏林台病院
加 藤 正 勝	帯広青年会議所
田 辺 豊 春	市社会教育推進委員会
山 内 良 一	〃
早 坂 裕 庸	市社会教育委員
真 鍋 智 紀	真鍋庭園緑化株式会社
山 田 哲	山田建築設計事務所
国 田 智恵子	帯広厚生病院
駒 込 幸 雄	市社会教育推進委員協議会
片 橋 茂 昭	市社会福祉協議会
斎 藤 裕	市社会教育指導室・準備委員会事務局長

昭和52年1月以前（市社会教育指導室）

森の少年隊創設のために次の準備がなされました。

- * 創設主旨・指導目的・指導方針案の作成
- * 活動計画・隊編成要領案の作成
- * 運営組織と規約及び設置要綱案の作成
- * 創設準備委員の選考と事前承諾
- * 後援組織の確立（営林局・支庁・市教育委員会）

昭和52年2月9日（創設準備小委員会開催）

協議内容

- * 準備諸案承認
- * 育成会役員・指導委員会委員長・父母会設立・隊長の決定
- * 隊員募集について
定員40名（小学校5、6年生男女各20名）とし、3月の市広報で新5年生を募集する。
募集説明会日時（3月27日10時）の決定
- * 隊歌の製作（おばらしろう・田代広和両氏に依頼）

昭和52年2月17日（創設準備小委員会開催）

協議内容

- * シンボルマーク・隊服・隊員証の形式決定
- * 今後の取り組みについて
52年度活動行事決定
活動指導員の確保（隊長に一任する）
- * 募集チラシの印刷と配布について
市教育委員会を通して各小学校に配布する。

昭和52年3月1日（創設準備委員会）

協議事項

- * 準備経過報告と承認



昭和52年5月7日
森の少年隊発隊式

昭和52年 3月27日（隊員募集説明会）

10時より市役所第2庁舎（西4南9）にて募集し、応募者58人（5年男子24名 女子34名）全員隊員として決定する。

昭和52年 4月22～23日（事前宿泊訓練1泊）

隊員及び指導員の顔合わせと、初年度の活動計画の説明を行う。

- * 班割り・正副班長を決定
- * 隊歌・隊列訓練
- * レク・ゲームで隊員が仲良く集団生活を体験する。

昭和52年 4月28日（育成会理事会）

協議事項

- * 父母会役員の決定
- * 事前宿泊訓練・創設準備について経過報告
- * 5月行事内容の検討・決定
- * 賛助会費・寄付金納入の協力依頼
- * 指導委員会の構成検討・決定

森の少年隊発隊

昭和52年 5月7日（森の少年隊発隊式 午後3時）

市民会館3階で「森の少年隊」の発隊式セレモニーが次の出席者のなか行われました。

隊員	58名	来賓後援機関
隊長・指導員	6名	帯広営林局長
指導委員長	駒込幸雄	十勝支庁長
育成会会長	山田勇雄	帯広市長
〃 副会長	林克己	帯広市教育長
〃 副会長	曾根博	
〃 副会長	大和田宏	その他
父母会会長	天間征	報道関係者
育成会役員	若干名	
隊員父母	40名程	

1 森の少年隊創設主旨

今日の産業・経済及び科学の進歩の中で、社会機構の複雑化は人間性の疎外や好ましくない社会風潮をもたらし、次代を担う青少年の福祉に幾多の問題をなげかけている。

今や、世界各国とも、青少年を心身ともにすこやかに育成することを一大社会問題として認識し、各種対策を講じている。

教育委員会では、生涯教育の観点から、帯広市のユニークな事業である「帯広の森、造成という大事業を、より帯広市の特色ある市民の活動の場とし、明日の帯広の担い手である青少年に、自然の中での活動を通し希望を与え、健全に育成することの重要性を認識している。

帯広市の特色ある街づくりの中で、自然保護・愛護の精神を生かし、青少年のもつエネルギーと冒険心を正しく導くために「森の少年隊」を創設するものである。

社会環境の悪化・余暇の増大など、青少年の健全育成対策の推進はいろいろな面で真剣に考えなければならない。

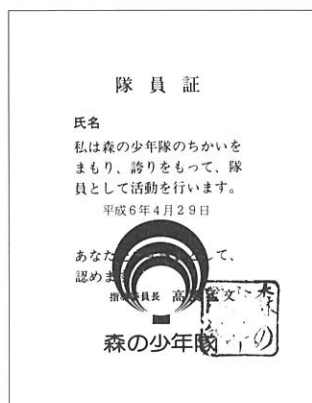
「森の少年隊」は将来的には地域的に編成し、全市的な青少年活動としたい。

市民と青少年行政機関が一致協力し「森の少年隊」の活動を推進することにより、心身ともに強健な青少年を育成したい。

2 指導目的

次代を担う青少年が自然に親しみ、自然保護の精神を養い、指導者や仲間とともに豊かな人間関係を展開させながら共同の生活経験を身につける。

また、自然の中での種々な活動を通し、心身ともに健康にして社会に適応できるように全人格の成長を目的とする。



森の少年隊 隊員証



昭和56年6月21日
アドベンチャーハイイクで
崖に登る隊員



3 指導方針

- ①責任と協力と並びに規則を守ることの大切さを理解させ、楽しい共同生活を体験させる。
- ②自然に対する新しい興味・関心の発見と、学習意欲の育成をはかる。
- ③集団活動を通し安全と健康管理の知識を与え、体力に自信をつけさせる。
- ④生活を豊かにする種々の技術を習得させ、豊かな創造力を育成する。
- ⑤自然との調和した活動を通し、自然愛護の精神を育成する。

4 育成会

理事会・事務局・指導委員会・父母会を持って組織し、森の少年隊の育成を図ることを目的とする。

5 父母会

隊員の父母で組織し、育成会の運営に協力する。

6 指導委員会

森の少年隊の安全運営ならびに隊員の主体性を促す指導を行い、隊活動の円滑なる運営全般を行う。

森の少年隊指導委員会メンバー（創設時人員）

指導委員長	駒込 幸雄	市社会教育推進委員協議会
隊長	片橋 茂昭	市社会福祉協議会
指導員	高橋 猛文	帯広ローターアクトクラブ
	〃 畠山 茂	〃
	〃 清野八重子	専門学校生
	〃 白岩由美子	洞田病院
	〃 壬生 薫	高校生

昭和52年度7月行事より参加した指導員

渡部 幸吉	帯広レクリエーション協会
和田 善秋	〃

以上の指導員9名と隊員58名（5班制）で森の少年隊の初年度の活動が始まりました。

「うた」と「ちかい」

森の少年隊のうた

作 詞・おばらしろう

作 曲・田代 広和

1. ラララン ラララン ゆこよ行こうよ
風がよぶ みどりの森へ
草と木と いずみわく村
しげるわかば かきわけて
ゆこよ しあわせの芽吹く
おびひろの おびひろの おゝ おびひろの森へ
2. ラララン ラララン ゆこよ行こうよ
鳥がよぶ しぜんの森へ
十勝はら においたつ土
まもる 森の少年隊
ゆこよ あこがれのひらく
おびひろの おびひろの おゝ おびひろの森へ
3. ラララン ラララン ゆこよ行こうよ
夢がよぶ こどもの森へ
雲はとび 小花さく道
肩をならべ 声あげて
ゆこよ よろこびのゆれる
おびひろの おびひろの おゝ おびひろの森へ

森の少年隊のちかい

ち かい

わたしは森の少年隊活動を通じて、美しい郷土帯広のまちをこよなく愛する人間として成長します。

1. わたしは、緑のボランティア活動をします。
1. わたしは、自然とのふれあいを大切にします。
1. わたしは、仲間とのきづなを大切にします。
1. わたしは、創造力を高め生活を豊かにします。
1. わたしは、帯広にふるさとをみつけます。



昭和52年 発隊式の初仕事 市民植樹宣言



活動内容の推移

初年度（昭和52年度）行事内容

月 日	行 事 内 容	行 事 場 所
4月23・24日	事前宿泊訓練 1泊	帯広児童会館
5月7日	発隊式セレモニー	帯広市民会館
5月8日	第3回市民植樹祭参加	帯広の森
6月26日	ハイキング（8.2km）・ 国見山森林学習	国見山
7月17日	野草園・動物園の観察	緑ヶ丘公園
8月6・7日	キャンプと登山 1泊	オンネトー
9月4日	フィールドアスレチック	十勝川コース
10月2日	炊事遠足	糠平キャンプ場
10月15日	どんぐり拾い	鈴蘭公園
12月4日	クリスマス会	帯広グランドホテル
昭和53年		
1月29日	映画鑑賞とスケート	緑ヶ丘公園
2月12日	天体観測 1泊	帯広児童会館
3月12日	新隊員募集（56名）	帯広市民会館
3月25・26日	新旧隊員合同研修 1泊	帯広児童会館

初年度でもあり、手探りの状態で活動指導をしていました。

春～秋の屋外活動期には自然と触れ合うことを主に考え、冬期間は屋内で自然学習などをするほか、できるだけ屋外でも活動できるものを選んで計画しました。

行事計画日の2週間前位に指導員が集まり、内容の検討・手配・案内文発送など、活動に向けての準備をしました。

6年目（昭和57年度）行事内容

月 日	行 事 内 容	行 事 場 所
4月10・11日	新旧隊員合同研修 1泊	帯広児童会館
4月29日	入隊式	帯広市民会館
5月2日	緑の羽根募金 5年隊	市内街頭
5月16日	第8回市民植樹祭参加	帯広の森
5月23日	巣箱掛けと森林学習	国見山
6月20日	冒険ハイキング	十勝種畜牧場
7月12日	農協乳業見学 6年隊	農協乳業
7月18日	炊飯実習 5年隊	岩内自然の村
8月6・7・8日	自然学習キャンプ 2泊	オサルシナイ
8月8日	開基百年記念パレード	市内中心部
9月23日	アスレチックとジャガイモの収穫	音更町内
10月16・17日	天体観測	帯広児童会館
11月14日	シティウォーク	百年記念館
12月19日	餅つきとクリスマス会	帯広児童会館
昭和58年		

1月22・23日	紙芝居とペープサート作り	帯広児童会館
2月13日	老人ホーム訪問	音更町
3月13日	卒隊の集い 1泊	帯広児童会館

隊員が多数のため隊別に行事を実施し、移動の負担を軽くする必要がありました。

行事回数は増加したが、本来の目的である自然との触れ合いや理解につながる行事は増えてなく、指導する側にも納得できる計画が作れないジレンマが感じられました。

行事活動の準備は、従来通り指導員が事前に集まって打合せをしていました。

13年目（平成元年度）行事内容

月 日	行 事 内 容	行 事 場 所
4月15・16日	新旧隊員合同研修 1泊	帯広児童会館
4月29日	入隊式（午前）	帯広郵便局
4月29日	緑の羽根募金（午後）	市内街頭
5月14日	市民植樹祭参加	帯広の森
5月28日	札内川桜並木の植樹	札内川左岸
6月18日	帯広川花壇作り（午前）	帯広神社横
6月18日	自然観察ハイキング	十勝種畜牧場
7月2日	桜並木草刈りと川遊び	札内川左岸
7月16日	炊飯実習	嵐山キャンプ場
8月4・5・6日	自然観察キャンプ 2泊	豊頃森林公園
8月20日	桜並木・花壇の草刈り	札内・帯広川
9月3日	桜並木草刈りと川遊び	札内川左岸
9月16・17日	野草園観察 1泊	帯広児童会館
10月1日	どんぐり拾いと蒔つけ	鈴蘭公園・市苗圃
10月1日	じゃがいも収穫（午後）	音更町
10月15日	オリエンテーリング	十勝川コース
11月11・12日	森林教室とゲーム 1泊	中札内村
12月10日	餅つきとクリスマス会	帯広児童会館
平成2年		
1月6・7日	製作実習（地球儀） 1泊	帯広児童会館
2月4日	第4回クイズ列車	JR根室本線
3月10・11日	卒隊の集い 1泊	帯広児童会館

初年度から毎年蒔つけしてきたどんぐりが成長し、昭和60年の第11回帯広の森市民植樹祭から使用されるようになり、また昭和59年から開始した札内川・帯広川での河川緑化と管理、昭和63年から行われているサルビアの花壇作り、緑の羽根街頭募金活動など、この時期に緑化推進に対する事業が明確に定着してきました。

発足当初目的としていた自然との触れ合いと、緑化推進事業の定着により 森の少年隊活動は大きく前進し、社会性を持ったものになってきました。

活動基本の確立

18年目（平成6年度）の行事予定

平成6年10月迄に実行された行事と、その後の計画

行事予定日		行 事 名	行 事 内 容	行事場所
4月	9・10日	事前合同宿泊訓練 1泊	新・旧隊員が共同生活体験でよく知り合う	帯広児童会館
4月	29日	平成6年度入隊式（午前）	入隊式セレモニー後、指導員と親の座談会	帯広郵便局
4月	29日	緑の羽根街頭募金（午後）	市内街頭で募金活動と花の種を配布	市内街頭
5月	15日	第20回市民植樹祭参加	植樹後、レクゲームと植物観察	帯広の森
5月	29日	河川緑化と公園管理後川遊び	帯広川で桜植樹後札内川桜並木の草刈り	帯広・札内川
6月	19日	公園管理と花壇作り	桜並木の草刈り後花壇へのサルビア移植	〃
7月	3日	帯広の森観察会	帯広の森の中で植物観察	帯広の森
7月	24～26日	自然学習生活キャンプ 3泊	自然観察とグループの力で生活体験する	オサルシナイ
7月	26～27日	道東地区緑の少年団交流集会	生活キャンプを続けながら集会に合流	〃
8月	21日	公園管理と花壇の草取り	桜並木の草刈りとサルビア花壇の草取り	札内・帯広川
9月	3・4日	野草園と野鳥の観察会 1泊	児童会館に宿泊し野草園と周辺の野鳥観察	帯広児童会館
9月	18日	公園管理と巣箱掛け	桜並木の草刈り後国見山で巣箱掛け	国見山他
10月	2日	どんぐり拾いと蒔き付け	拾ってきたどんぐりを苗圃でポット植え	帯広市苗圃
10月	16日	第4回育樹祭参加と花壇整理	育樹作業後花壇のサルビアの抜き取り	帯広の森他
11月	12日	スポーツ・レクリエーション	スポーツとレクゲームで隊員の交流を図る	帯広森体育館
12月	11日	植物クイズ教室	身近な植物をパネル写真でレクチャー	サラダ館
平成7年				
1月	7・8日	宿泊新年会 1泊	ゲームなどで楽しく過ごす新年会	帯広児童会館
2月	5日	第2回ミステリークイズ	自然を対象にしたクイズで優勝者を決める	〃
3月	4・5日	卒隊のつどい 1泊	6年生隊員とのお別れ会	〃
3月	19日	新隊員募集説明会	活動内容・運営要項等の説明と隊員の決定	百年記念館

平成3年度から自然観察に関する活動がさかんに行われるようになり、隊員の自然に対する関心が徐々に高まってきました。各方面からの支援も寄せられ、植物図鑑や野鳥図鑑・双眼鏡などもそろいはじめ、隊員1人に各一点ずつ持たせることができつつあります。

ここにきてようやく身近な自然を自分の力で調べられるようになり、興味のある隊員は自分の図鑑を購入

する者も出始めてきました。

森の少年隊の最終的な目的は、自然の大切さを学ぶことであり、そのための第一歩は自然を認知することから始まります。今まで眺めていた自然から、自分の足で林に入り、目で確認し、手で触れ、そして調べて知る。つまり観る自然へと変革することがもっとも大事なことになります。



昭和62年5月17日
昭和62年5月23日
緑の羽根街頭募金
第13回市民植樹祭



森の少年隊主要事項

◎隊員数の変化

元 号	5 年隊員	6 年隊員	総隊員数
昭和52年	58名	0 名	58名
53年	56名	58名	114名
54年	40名	56名	96名
55年	43名	40名	83名
56年	45名	43名	83名
57年	39名	45名	84名
58年	30名	37名	67名
59年	17名	30名	47名
60年	23名	17名	40名
61年	17名	23名	40名
62年	14名	17名	31名
63年	12名	14名	26名
平成元年	15名	12名	27名
2 年	14名	14名	28名
3 年	22名	14名	36名
4 年	32名	21名	53名
5 年	28名	32名	60名
6 年	28名	28名	56名

◎隊員の平均出席率（平成元年度より調査）

平成元年度	82.0%
2 年度	82.3%
3 年度	83.3%
4 年度	81.2%
5 年度	77.0%

◎各種表彰

緑化活動が評価を受け、次の表彰を受けました。

昭和59年 7 月26日

第 1 回帯広市都市景観活動賞
帯広の森での活動を評価して

昭和61年10月17日

建設大臣より都市緑化功労賞
都市公園の緑化と保全美化の業績
により

平成 2 年 7 月18日

北海道開発局長より治水功労賞
河川の清掃美化の業績により

平成 3 年10月16日

(勲)木原営林大和事業財団表彰
緑の愛護活動を評価して

平成 5 年 8 月11日

前田一步園賞
帯広の森や札内川での緑化活動の
功績により

このほか、北海道造園建設業協会十勝支部・北海道河川環境整備促進協議会・北海道国土緑化推進委員会より助成を受け、森の少年隊の活動がなされています。

◎森の少年隊小史

昭和52年 5 月 7 日

森の少年隊創設（隊員58名）

昭和54年 8 月 3 ～ 5 日

自然学習キャンプを 1 泊から 2 泊
3 日に組み替え

昭和55年 4 月 1 日

第 1 回隊服変更
父母会解散・育成会事務局長及び
理事解任・指導委員会事務局設
置・ジュニアリーダー採用（卒隊
者より 8 名選出）以後定期的に採
用



昭和63年 7 月10 日
平成 6 年10 月16 日
第 4 回育樹祭
公園管理札内川桜並木の草刈り



昭和57年 7 月25日

中札内村子供会の野外研修会に参加交流（於：中札内村自然の森）

昭和59年 5 月20日

河川緑化事業開始（札内川左岸）

昭和59年 9 月27日

中曽根総理大臣と記念植樹

昭和60年 5 月12日

帯広の森の植樹に、森の少年隊が育苗したかしわの苗木が初めて使用される（以後毎年使用）

昭和60年 7 月30～31日

全国緑の少年団交流会（於：福島県郡山市）に北海道代表として3名が参加

昭和60年 9 月29日

帯広の森・秋の記念植樹参加

昭和62年 9 月13・14日

全国育樹祭（於：札幌市）に全員参加

昭和63年 6 月19日

花壇作り事業開始（帯広川右岸鎮橋下流）

平成元年 4 月29日

指導委員長に高橋猛文が就任、前委員長駒込幸雄が相談役に就任、指導委員会事務局長に畠山茂就任

平成3年 8 月1～4日

自然観察キャンプを2泊から3泊4日に組み替え

平成5年 7 月18日

第1回帯広の森観察会実施（以後毎年実施予定）

◎胸がドキドキ中曽根首相との記念植樹（昭和59年9月27日新聞記事より）

檜野路子（当時帯広西小学校6年）

胸がドキドキして、緊張でいっぱいです。5年生のときから森の少年隊に入り、いま副班長をしています。

総理大臣と一緒に記念植樹できるなんてとてもラッキーです。学校の友達もみんな少年隊に入れば良かったな、と言っています。担任の先生も、いい思い出が出来て良かったね、と言ってくれました。

三城由香（当時帯広緑ヶ丘小学校5年）

今年の4月に入隊したばかりなので「まさか」と思いました。

日本一広い帯広の森を総理大臣に見せてあげたい。そして緑いっぱいの日本をつくってほしいと思います。

私が二十歳になった時、もう一度成長したオンコの木を見てみたい。

◎森の少年隊の指導委員として協力いただいた方々

駒込 幸雄	片橋 茂昭	高橋 猛文	畠山 茂
畠山八重子（旧姓清野）	壬生 薫	白岩由美子	
渡辺 幸吉	和田 善秋	高橋 智	根本 光志
大橋 正明	松田 正信	佐藤 愛美	高木 智子
中村 直美	荊木真実子	石邑 照美	一円 永子
東 幸子	阿部 勉	長谷川久美	神長 一美
檜木 裕子	小川 央	芦口 克明	牧野 玲子
小田 和伸	甲田 渉子	小林 玲子	井神 千博
佐藤 栄治	須藤 功	小川 公子	飛谷 隆嗣
大滝 智子	清水 圭介	小山 攝津	三輪 弥子
伊藤 由香	山内 瑞穂	加茂佐恵子	筒渕 美幸
西尾ひろみ	河原 秀和	青木 洋二	



ジュニアリーダー

森の少年隊活動を支え、今日の活動基盤をつくれた背景に、卒隊した隊員から定期的に出出して採用してきたジュニアリーダーの存在があります。

隊員として2年間の活動が終わり、中学生になる時に選出して採用された者をジュニアリーダーと呼び、行事活動時の補佐を行ってもらいます。

また、彼等の中で高校生になっても活動の手助けをしてくれる者をリーダーと位置付けし、指導員の補佐や指導の代理を行ってもらいます。

このリーダーの中から、社会人・大学生になっても活動参加できる人に指導員となってもらいます。

リーダーのほとんどが進学のため帯広を離れ、森の少年隊活動から遠ざかってしまいがちですが、卒業後帯広に就職が決まり、指導員として活動に復帰してくれる者や、高校卒業後地元で就職したり、地元の大学や専門学校に進んだ人達がそのまま活動を続けてくれるようになり、指導員の確保に大きな目どがたつようになってきました。

これらの人達は隊員経験者なので、非常に指導力が高く、より高度な活動の導入に大きく貢献してきたといえます。

ジュニアリーダー制度がもたらした大きな成果といえます。

◎年度別ジュニアリーダー採用数（4月採用）

昭和54年	男子4名	女子4名	計8名
〃 55年			〃 0名
〃 56年	男子3名	女子3名	〃 6名
〃 57年	〃 3名	〃 4名	〃 7名
〃 58年	〃 4名	〃 4名	〃 8名
〃 59年	〃 4名	〃 4名	〃 8名
〃 60年			〃 0名
〃 61年			〃 0名
〃 62年	男子3名	女子3名	〃 6名
〃 63年	〃 3名	〃 3名	〃 6名
平成元年		〃 1名	〃 1名
〃 2年	男子2名	〃 2名	〃 4名
〃 3年	〃 2名	〃 2名	〃 4名
〃 4年	〃 1名	〃 2名	〃 3名
〃 5年	〃 3名	〃 3名	〃 6名
〃 6年	〃 2名	〃 3名	〃 5名

◎平成6年度指導員会名簿

指導委員長	高橋 猛文	リーダー11期生	安田 早苗
隊長	大橋 正明	〃 12期生	長田 彰浩
副隊長	1期生 大滝 智子	〃 12期生	安田 智志
指導員	5期生 三輪 弥子	〃 12期生	安藤 百恵
〃	6期生 加茂佐恵子	〃 13期生	牧野 一也

指導員8期生 筒渕 美幸 リーダー13期生 杉本加奈子

〃 10期生 西尾ひろみ

事務局 ジュニアリーダー 14期生 3名

事務局長 畠山 茂 15期生 5名

行事担当 小川 央 16期生 5名

会計担当 畠山八重子 計 13名

救護担当 小川 公子

企画担当 片橋 茂昭

企画担当3期生 河原 秀和

〃 3期生 飛谷 隆嗣

〃 6期生 青木 洋二

森の成長とともに

森の少年隊が発隊して18年が過ぎ、手探りで始まった指導体制も、帯広の森の成長とともにさまざまな変化をたどってきました。

現在では卒隊した隊員から定期的に出出してきたジュニアリーダーが成長し、副隊長や指導員として活躍してくれるようになり、ようやく指導員が自賄いできるようになってきました。

活動の目的も緑化推進の実践で社会性をそなえ、観察会や勉強などにより、自然の大切さも学習できる段階になってきました。

最初は植えるだけの森作りでしたが、平成3年度から育樹祭も行われるようになり、植えることと育てることが同時進行するようになった帯広の森は、森の少年隊にとってすばらしい生きた教材に変化しました。

森の中を一回りしてみると、一々説明するまでもなく木々の成長や、これまでに至るのに必要とした年月の長さまで理解することができます。

また、森の中には今までに見られなかった草本植物や野鳥をはじめ、リスや小鳥たちに運ばれたと思われる木本植物が自生しており、隊員たちの自然観察会には、近くで安全で様々なことが学習できるまたとない場所となりました。

帯広の森はさらに大きく成長すると思いますが、その成長に伴い、森の少年隊活動も、現在よりさらに高次元の段階へと進めて行くことが必要とされてくるでしょう。

生物を大切に愛することは、地球を愛することにつながり、地球を愛することは民族を大切に思い、隣人を愛する心を育てます。

自然の中で、人間は本当の人間らしさを取り戻すことができるといわれていますが、今こそ自然の大切さを認識し、せめて「帯広の森を大きく育てよう」とする仲間作りの輪を広げていくことが大切だと思います。

今後の森の少年隊活動を展開していく中で、このようなことを十分に理解し進めていくことが望ましいと考えます。

§2. 森と野鳥たち

(1) 初期の帯広の森（昭和53年～55年）

この原稿は、昭和56年3月31日、帯広市教育委員会発行の郷土誌「十勝」第16号に発表したものの一部です。

市民によって行われている植樹祭も今年で7年目を迎えた。まだ木が小さくて、森の様相はなく、生息する野鳥のほとんどが草原性のものである。調査を始めたのは昭和53年5月からで、12月までに観察された種類数は37種であった。

その後、年々種類数も増し、昭和55年12月末現在で52種が観察された。比較的個体数の多いのはヒバリ、ノビタキ、シマアオジ、アオジ、ノゴマ、オオジュリンなどの草原性の野鳥たちである。5月から6月にかけて彼らのかなでるコーラスは素晴らしい。それにカッコウも時々アクセントをつけてくれる。

注目すべきは、昭和53年と54年にチゴハヤブサが繁殖。55年にはトラフツクが2組繁殖したことである。森の木も大きくなるにつれて森林性の野鳥たちの繁殖記録も多くなるであろう。これから5年後、10年後と市民によって創造されてゆく帯広の森には大きな夢がある。今後野鳥を含めた野生動物たちの種類数、個体数共ふえてゆくであろう。

帯広の森への提案（野鳥の立場から）

1. 人工池、周辺にサンクチャリーを作ろう。

人工池を作る構想があるようであるが、1日も早く完成してほしいものである。池ができれば水辺の野鳥たち、マガモ、カルガモ、コガモなどの鴨類、その他カイツブリ、バンなども集まってきて繁殖するし、将来オオハクチョウの渡来も夢ではないだろう。池を含め周辺にサンクチャリー（野鳥の聖域）を作りたいものである。野生動物に関心を持つ人々が喜んでボランティア活動に参加してくれると思う。

2. 調和のとれた草原を作ろう。

森林が育つにつれて、このままだと草原性の野鳥たちが姿を消すであろう。そこで計画的に草原を作ることである。野草類があまり密生しないよう手を加え、十勝が誇るノビタキ、シマアオジなどの楽園にしたいものである。

今後の参考資料となると思うので、当時観察された52種を表にまとめてみた。10年、20年後の研究者によって記録されるものと比較すると重要な結果が得られるものと思う。

表1. 帯広の森野鳥（S53.5～S55.12）

比較的观察頻度の高いもの
一回のみ、観察頻度の低いもの
○（備考欄中） 繁殖確認

科	目	種	名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ガ	シ	カ	モ					○			○					上空通過
ワ	シ	タ	カ			○			○			○	○			○
キ		ジ	ウ							○						
シ		ギ	マ					○	○							上空通過
		オ	ジ													○
ハ		ト	キ													○
ホ	ト	ギ	ス													
		カ	ツ													
		コ	ウ													
フ	タ	ロ	ウ													○
		トラ	フ													
ヨ	タ	カ	ヨ													声のみ
ア	マ	ツ	バ													上 空
		ハ	リ													○
キ	ツ	ツ	キ													○
		ア	リ													
		ス	イ													
		ア	カ													
		コ	ア													○
		カ	ガ													
ヒ		バ	リ													○
		ヒ	バ													
セ	キ	レ	イ													○
		ハ	ク													
		セ	グ													
		ロ	セ													
		ビ	ン													
		ズ	イ													
ヒ	ヨ	ド	リ													○
		ヒ	ヨ													
モ		ズ	モ													○
レ	ン	ジャ	ク													
		キ	レ													
ツ	グ	ミ	ミ													○
		ノ	ビ													○
		タ	キ													○
		ア	カ													○
		ハ	ラ													○
		ミ	ツ													○
ウ	グ	イ	ス													10日間位 滞在
		ウ	グ													
		マ	キ													
		ノ	セ													
		コ	ノ													
		ヨ	シ													
		セン	グ													
		ダイ	ム													
		シ	ク													
エ	ナ	ガ	シ													○
		マ	エ													
シ	ジュ	ウ	ガ													○
		ハ	シ													
		ト	ガ													
		ラ	シ													
		ジュ	ウ													
		ガ	ラ													
ホ	オ	ジ	ロ													○
		ホ	オ													
		ア	オ													
		シ	ア													
		ア	オ													
		オ	ジュ													
ア	ト	リ	リ													
		ア	ワ													
		カ	ワ													
		ベ	ニ													
		シ	ベ													
		ベ	ニ													
		マ	シ													
ハ	タ	オ	リ													○
		ス	ズ													
ム	ク	ド	リ													○
		ム	ク													
		ド	リ													
カ	ラ	ス	ミ													○
		ヤ	マ													
		カ	ケ													
		ハ	シ													
		ボ	ソ													
		ゴ	ラ													
		ハ	シ													
		ア	ト													
		ガ	ラ													
25	科															52 種

(2) エゾリスの会の調査

エゾリスの会の記録と昭和50年代の記録とを比較し、観察月数の増減をみました。例えばカルガモが昔は5月と8月に記録があるのに現在は6月しか記録がない場合、観察減少-1です。会の調査は3月と12月は実質的に行われていないため、計算には含めていません。

21種の新規観察の内、水辺の鳥8、草原の鳥1、森林の鳥で繁殖期の観察7、森林で非繁殖期4、高山の鳥1です(表2)。水鳥の増加は調整池の環境整備によるものでしょう。複数月の観察はマガモとキンクロハジロのみで、他はほぼ1回のみです(表3)。この池はすり鉢状地形の底で小面積のため、野鳥に不安をあてえます。その解消や自然復元ができれば増加するでしょう。12種の森林の鳥は観察月数も回数も少なく(表2、3)今後調査を続ける必要があります。

12種類の野鳥の記録が無くなり、チゴハヤブサ、トラフズクなど草原と森林の猛禽が含まれています。調査時間の関係で観察できなかった可能性があるものは、ウズラ、ヤマシギ、ヨタカです。また草原の鳥のマキノセンニュウとオオジュリン、冬鳥が2種類、繁殖し

ていたコムクドリの観察もありませんでした。

観察月の増加は3種類だけで、最も多いハクセキレイは農村部や市街地でも良く見かける野鳥です。

約半数の31種で観察月が減少し、3月以上の減少は21種でした。なかでも、アカゲラ、ゴジュウカラなど森林性の留鳥の減少が目立っています。

私はこの原稿を書くまでは、鳥は増えたと思っていました。しかしこの結果で「森で野鳥が増えている」とは思えなくなりました。問題は観察消滅や減少の43種類に対し増加と新規の合計が24種。この2倍近い差をどう解釈したらいいのだろうかということです。

観察場所は今も昔もだいたい同じで、観察の密度は昔の方が濃く、2～3倍。期間は今の方が長いので回数では1.5倍程昔の方が多いようですが、これで3月以上もの減少などの説明はできません。

森の周辺環境の悪化は大きな要素でしょう。誰もが近年の西帯広地区の変化に「昔は何にもなかったのに」驚きます。また、河畔林や孤立林も減少する一方です。周辺環境にプラス要素はありません。

帯広市全体の自然の力が下降しているわけです。

森の自然環境の変化も原因の一つで、木が成長し、鳥相が草原性から森林性へと変わる現象がみられます。例えば草原性のホオジロ、ホオアカ、コヨシキリ、ヒバリなどが減少や消滅し、新規の約3分の1は森林性です(表2)。ただこれでもアカゲラやゴジュウカラ等森林性の留鳥の急な減少を説明できません。

森の自然環境の悪化としては、現在の運動施設区はシマアオジなどの格好の繁殖地でしたが、現在は勿論ほとんどいません。しかしこれは草原性の野鳥です。森林性の留鳥の減少の説明にはなりません。

憶測ですが、帯広の森の大部分は、草原性の野鳥にも森林性の野鳥にも中途半端な過渡的な状態にあるようです。長い時間でそれなりの森になるかもしれませんが、周辺環境の悪化の速度に比べれば、植樹の成長はゼロに近いものです。生態系としての自然全体の成長はさらに遅い。それまで動物たちはどこで待てばいいのでしょうか？周辺環境は悪化するばかりなのに。

生きものは森の備品ではありません。生きものは命を紡ぎつつ、自然の中でくらしているのです。

そのために行われたことは、調整池の整備関係ぐらいでしょう。森の全体的・将来的な展望の中に、生きもののための具体的な計画がないのでは、展望がないのと同じです。森をつくる市民も組織(市役所など)も貧しい自然観や知識のままだったらどうなるか、大変不安です。生きものへの努力をあまりしなかったこの20年間で、将来に何を残すのでしょうか？

今の森でも、小さな市民活動などで自然の力をアップしてゆく方法はたくさんあります。そこには楽しさや豊かさや教育や文化の芽があります。一方全体的・将来的な面では組織の力が必要です。なにしろ現在と

将来を同時に考え、自然の復元・管理と利活用、調査と環境教育などを世代を越えてやる場所です。これらを総合的に考える能力が必要です。植樹をしたように、外部の組織の力を使ってでもそういった活動を根づかせる必要を感じます。木を植えるだけでいいわけではないことを、はやく市民に感じて欲しいものです。

野鳥は適した環境を敏感に察知して飛んできます。野鳥の暮らしぶりは常に森を映しているのです。

表2. 鳥類の観察回数
(1989～93)

種 名	回	種 名	回
アカエリカイツブリ	1 水	キンクロハジロ	4 水
ハジロカイツブリ	1 水	イカルチドリ	4 水
アオサギ	1 水	コアカゲラ	4 森
カルガモ	1 水	ツグミ	4 冬
コガモ	1 水	コヨシキリ	4 草
カモSP	1 水	マヒワ	4 冬
ハイタカ	1 森	カッコウ	5 疎
ツツドリ	1 森	アカゲラ	6 森
セグロセキレイ	1 水	ノゴマ	6 草
アカモズ	1 草	エナガ	6 森
コルリ	1 森	スズメ	6 街
ウグイス	1 森	トビ	7 街
メボソムシクイ	1 森	アカハラ	7 森
エゾムシクイ	1 森	ヒガラ	7 森
センダイムシクイ	1 森	ベニマシコ	7 草
ゴジュウカラ	1 森	カワラヒワ	9 街
ホオアカ	1 草	ハシボソガラス	9 街
イカル	1 森	ヒヨドリ	10 街
ハシブトガラス	1 街	モズ	10 疎
アリスイ	2 疎	ヒバリ	11 草
キビタキ	2 森	ノビタキ	11 草
ウソ	2 冬	ハシブトガラ	11 森
ニューナイズメ	2 森	ムクドリ	11 街
イソシギ	3 水	マガモ	12 水
エゾセンニュウ	3 森	ビンズイ	12 森
キクイタダキ	3 森	ハクセキレイ	13 街
ホオジロ	3 草	オオジギ	15 草
シマアオジ	3 草	キジバト	15 疎
イスカ	3 冬	シメ	16 森
カケス	3 森	シジュウカラ	18 森
ホシガラス	3 森	アオジ	22 疎

森：森林の鳥
草：草原の鳥
疎：森～草の鳥
街：人里を好む
水：水辺の鳥
冬：冬の鳥

表3. 1978(S53)～80年と1989(H元)～93年の記録の比較

新規観察	+	観察消滅	-	観察増加	+	観察減少	-
アカエリカイツブリ	1	チゴハヤブサ	*6	アリスイ	1	カルガモ	1
ハジロカイツブリ	1	ウズラ	2	ハクセキレイ	4	トビ	6
マガモ	7	ヤマシギ	2	ヒヨドリ	2	カッコウ	3
コガモ	1	トラフズク	*4			ハイタカ	3
キンクロハジロ	3	ヨタカ	2			オオジギ	2
アオサギ	1	ハリオアマツバメ	4			キジバト	2
イカルチドリ	1	キレンジャク	1			アカゲラ	5
イソシギ	1	マキノセンニュウ	2			ヒバリ	4
アカモズ	1	オオジュリン	2			ビンズイ	1
コルリ	1	アトリ	2			モズ	2
エゾセンニュウ	1	ベニヒワ	1			ノゴマ	2
メボソムシクイ	1	コムクドリ	*6			ノビタキ	3
エゾムシクイ	1					アカハラ	3
キクイタダキ	2					コヨシキリ	3
キビタキ	1					センダイムシクイ	1
マヒワ	2					エナガ	6
イスカ	2					ハシブトガラ	4
ウソ	2					ヒガラ	4
イカル	1					シジュウカラ	3
ニューナイズメ	1					ゴジュウカラ	9
ホシガラス	2					ホオジロ	4
						ホオアカ	5
						シマアオジ	2
						アオジ	2
						カワラヒワ	3
						ベニマシコ	2
						スズメ	7
						ムクドリ	6
						カケス	4
						ハシボソガラス	4
						ハシブトガラス	9
種名のあとの数字は観察月の増減を示す *89～93年は3月と12月は調査が行われていないため記録の増減に含めていない							
*印繁殖種							
21	種	12	種	3	種	31	(21) 種

() 内3月以上減

§3. 森と草花・樹たち

十勝平野の広大な拡がりの中心地帯広、その帯広に開拓の鋤が下されてから百有余年、北海道で5番目の大きさの都市となっています。

北に大雪山系、西に北海道の脊骨といわれる日高山脈の美しい山々、東には阿寒の山と白糠丘陵にかこまれ、そうした山々から流れ下る母なる川、十勝川をはじめとする多くの川、川の流域、そして河岸段丘、太平洋へと流れる河川によって開かれている、この十勝平野。その昔、鬱蒼と繁っていた大森林、そしてここに開拓の鋤を入れた先人達、思いをはせると大きな夢に将来をかけてきた人々の心が、胸にひしひしと感じられます。

帯広の森の遠大な構想は、都市緑化の目玉として注目をあび、市議会の論議、市民の協力等、多くの方々の熱意によって、市民が自らの手で創ろうと市民植樹祭が行われ、更には、この森をよく育てるために育樹祭が行われるまでに進められてきたことは、本当に素晴らしいことと思います。

さて20年の歳月をへた今日、着々と進められてきた森づくりの多くの人々の努力、こうした中にあって、私達は今後どのようなことを心掛けていけばよいのだろうか、というようなことを、色々の角度から考えてみようと思います。そのことが、今まで苦勞し、努力してこられた方々への恩返しでもあり、今後の人々への贈り物にもなるのではないかと思います。

森の造成地の大部分は、開発された畠地、牧草地等で、その外は、河川沿い、沢すじ並にその斜面という状態の土地とっていいと思います。昔のことを考えてみると、乾燥地の平地は十勝特有の^{かしわ}榊林だったろうと思われます。また沢沿いは、ハルニレ、ヤチダモ、ハンノキ等の、湿地性の樹林帯だったろうと思われます。そこで、これからの帯広の森づくりについて考えることといえば、現在あまり人手の入っていない河川沿いや沢すじ、その斜面等にある自然林については、可能な限りそのまま残す必要があると思います。そこには、森の草花達がのこっているところだからです。

尚、防風林として自然がのこされている部分も大切にしなければならぬ部分です。広く十勝全体の成りたち、帯広のおかれている位置、そして現在の周囲の状態、こうした点を考え、草木一つ一つについても、その存在の意味を考えてみる必要があるように思うのです。単にそれは貴重な天然記念物だからとか、希少植物だからということだけで、その物を見るのではなく、広く自然の成り立ちから考えてみる必要があると

思うのです。生物については、その生育にはバランスが大切ですから、このことを充分考えてかからなければいけないと思うのです。その土地の持っている特性、地質学的にも生物学的にも、それらが総合された中で考えていくべきものだと思います。大自然と人間とのかかわりの中で、自然との触れあいの中で生きていく人間ということを考えて、大きな緑の地帯を創りあげていく夢の森なのですから、総合的な物の考え方を大切にしていきたいものです。

帯広の森の現況

今までの20年をふりかえてみると、苗木を取得する関係から、樹種についてみてもちょっと気掛かりな点があります。それは安易に外来種が多量に導入されている点です。それは調達の容易さ、活着度の良さなどから、そうなったようですが、このへんで充分考えてみなければならない段階にきていると思うのです。先にも述べたように、十勝の平野部の乾燥地は、主としてブナ科のカシワが中心になっているカシワ林だったのですから、このカシワが中心となる林こそ、十勝の森林の姿だと思われるのです。自然の浄化の問題からみても、針葉樹よりは広葉樹ブナ科の植物の空気の浄化力は格段の差があることを考えてみても、都市周辺の森としての存在から考えてみて、安易に外来常緑樹の松類を入れることは、もうこのあたりで打ち止めにしたいものだと思うのです。

河川沿いや、沢すじ、斜面等の現存する樹種は勿論であるが、郷土種のカツラ、イタヤ、ミズナラ、アオダモ、ハリギリ、シナ、キタコブシ等もっともっと植栽し、変化をつけるためには、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等紅葉する木々を、また当初計画したように、実のなる樹種も取り入れる必要があると思われます。

現在存在している柳についても、この保存とその育成をはかりたいものだと思います。昔、水の存在していた所、水の流れのあった所には、必ず柳が存在していました。ヤナギ科の種類についてみても小川や湿地近くにはイヌコリヤナギ、湿地や河岸のタチヤナギ、オノエヤナギ、小石の多い所のエゾヤナギ、あるいは平原等にも多いシロヤナギ、水辺のエゾノキヌヤナギ、川辺のエゾノカワヤナギ、川岸や湿地のカワヤナギ、山野の水辺に多いネコヤナギ、山地や平地のエゾノバッコヤナギ等々、まだまだ多いのがヤナギの類で、これ等のものが自生で残存しているので、是非ともこれらはその生き方を見守ってほしいと思うのです。

ハルニレ（アカダモ、エルム）については、残存のものも植栽されたものともかなりありますが、この仲間の

コブニレというのや、オヒョウニレ等も育てていきたいと思います。

カツラ科のカツラももっと導入してほしい樹種の一つです。春の芽ぶきの美しさ、秋の色づきの美しさは格別です。

モクレン科では、キタコブシ、ホオノキ等は花も美しく香りもよい木としていい樹種と思います。

クワ科のヤマグワも十勝には割合に多い木で、中高木としてあっていい木ではないでしょうか。

沢沿い、川沿いの春一番先に緑が目につくエゾノウワミズザクラやシウリザクラ、エゾサンザシ等も森づくりにはいい樹種ではないかと思われます。

エゾノコリンゴは十勝ではどこでも見られる木でしたが、現在では非常に少なくなってきました。植栽する地帯や場所を選定して、育てていい木かと思われます。

低木の方では、ホザキノシモツケ、ホザキナナカマド、エゾヤマハギ、オオタカネバラ、エゾイチゴ、クロイチゴ、ナワシロイチゴ、フッキソウ、エビガライチゴなど多くありますが、高木帯と中生木帯とのバランスの中で、こうした低木類の育成も考えていくことが重要ではないでしょうか。

シナノキ科のシナノキ、アオジナ等も忘れてならない高木です。

ウコギ科のエゾウコギ、オニウコギも自生しているので上手に他の木と共生させていくことを考えるべきものと思います。先に述べたハリギリ（センノキ）もこの仲間です。

つる性の木は、他の木に与える影響もあって、あまり喜ばれませんが、ある程度共生させるべきものと思われます。それ等の中で現存するサルナシ（コクワ）ミヤママタタビ、マタタビ、オニツルウメモドキ、ヤマブドウ、チョウセンゴミシ等、工夫して共生させて森を育てあげたいものだと思います。

森の中心を構成する骨組みとなる樹木は、郷土種を中心として考え、帯広の森の造成計画の主旨を生かしていくべきものと考えられます。

以上のようなことから、現在まで市民参加で営々と植樹し、育成してきた森について反省すべき点を反省しつつ、十勝の中心地帯広の宝庫として帯広の森を育てあげ100年の大計にたって子孫にのこす森を考えていくべきと思うのです。

根幹なる樹木について述べてきたので、これから少しく草木について述べてみたいと思います。

さて先に述べた森づくりのはじめ樹種の選定にあたって、外来種のマツ類を多く導入した点、もうこの辺で終にしてはと提言した点について、重要なことがあるのです。このことは忘れてならない点なので、少しく述べてみたいと思います。

樹木の単純化は、下草等についても単純化すること。これに関連して昆虫、鳥その他生物も単純化すること。したがって病害虫が発生した場合、その被害は大きくなるばかりでなく、致命的となることもあり得るということを思わなくてはならないのです。

また単純化した草本地帯は、変化に乏しく面白くないといえます。しかも外来種が入りやすく、林内の堆積物も単純化していくということにもなります。こうした意味からも、補植等の際、充分考慮して他の樹木を入れ混合林形成に心掛けるべきだと思います。

帯広の森の半自然植生地の育成保存、植栽地群落の構造、組成の変革、自然の遷移に対する人為的影響等を充分考えて臨まなければならないことと思います。

十勝では、いたる所で簡単に見ることができたスズランも今では帯広近郊ではそう簡単に見られなくなっているし、オミナエシ等についてもなかなか見ることができなくなっているのが現状です。湿地帯ではオオバナノエンレイソウが美しく春を飾ってくれていますが、これとてそう安心しておれるでしょうか。牧草や開発によって進められる芝草等に混入して種子によって入ってくる外来の植物は、かなりの速さで全道に拡がり、十勝にも大きな波となって押しよせています。

帯広の森の中にも、こうした外来種の侵入によって在来の多くの草花が大きく圧迫を受けている面を見のがしてはならないと思います。

外来種の最も猛威をふるっているものは、キク科のオオアワダチソウ、セイタカアワダチソウ、オオハングンソウ、アラゲハングンソウ、ノボロギク、シナガワハギ、ハルザキヤマガラシ、キレハイヌガラシ、コウリントンポポ、ヒメジョオン、マツヨイセンノウ、セイヨウタンポポ、メマツヨイグサ、シロツメクサ、アカツメクサ、ヒメムカシヨモギ、アオゲイトウ、ヒメスイバ、エゾノギシギシ、カモガヤ、オオアワガエリ等々で数えあげるとまだまだ多い。これ等も草は外来の牧草や植物の種子に入ってきて日本に渡り、定着し繁殖しつつつけているものばかりです。あまり気にならないものもあるが、私達の日常生活に、あるいは植物の生育の上で大変気になるものも多い状態です。いわゆる生物が互いに助けあって生きていくうえで障害になるものでは困るわけです。帰化植物の場合、その土地が適合すると、天敵がいないので爆発的にふえるということが問題で、在来種が大きな圧迫を受けることが重大な問題なのです。

今後の草花たち

帯広の森についての現在までの様子を、おおまかに見てきましたが、それでは今後どのようにしていけばよいかについて考えてみたいと思います。

・第一に、豊かな林床を復元するようにしたい。

高木、中生木、低木のそれぞれの密度、明るさ等

考慮しながら、外来種等は極力除去するように、色々な面で選択的に取りあつかって、いい林床、いい森林づくりを目指すべきだと思います。

これを実施するためには、多種多様な樹種の導入や、樹令差等も考慮に入れなくては多様性が生まれてこないと思われます。

- ・第二に育樹祭等に於ても林床について考えて行う。

林床の植物についても充分研究しながら、育樹、間伐等を進めるといことです。

- ・第三に、潜在植生、現存植生を大切にしたい。

十勝平野に栄えていた草花、低木等を含め、潜在的なものの復元、現存種の存続について努めなければならないと思います。

以上の3点を充分考えた上で、帯広の森づくりが着実に進められるよう努力すべきだと思います。

次には草花を帯広の森として述べてみたいと思います。

帯広を中心とした草花たち

まだ十分な調査は実施していないので、その総てを述べることはできないが、現存する草花、また復元可能な草花などについて少し述べてみようと思います。

凡そ100科余り、500種以上は存在すると思われます。その中で帯広の花に定められているクロユリは、帯広の森にはかなり多く存在していることが確認されています。多くの人に愛されているラン科の植物で北方ランとして存在している野生のものは、トンボソウ、ハクサンチドリ、オニノヤガラ、エゾスズラン、ササバギンラン、ネジバナ、クモキリソウ、コケイランなどがあります。ランという名がついてもランではなく、ユリ科の花も随分多くあります。あげてみますと、スズランがあります。これはユリ科です。ユリ科では春早く湿地帯で青々と繁るバイケイソウ、その仲間のシュロソウ、私達のよく知っているエゾカンゾウ、エゾキスゲ、春早いキバナノアマナ。山菜として有名なギョウジャニンニク、ユキザサ、シオデなどもこのユリ科です。クロユリ、オオウバユリ、美しいエゾスカシユリ、道端に見られるオニユリ、あまり見ることはなくなったが、アスパラガスに似ているキジカクシ、春美しく一面に咲くオオバナノエンレイソウ、目立たないがクルマバツクバネソウ、ヒメイズイ、またオオアマドコロ、マイズルソウなどはすべてユリ科の花々で、帯広の森の草花達の仲間です。

アヤメ科ではヒオウギアヤメ、アヤメ、キシノウエなどが見られます。

サトイモ科の草花では何といっても春の王者ミズバショウがあげられます。そのほかザゼンソウ、ヒメザゼンソウ、ヒメカイウ、コウライテンナンショウなどがあります。

イラクサ科の草花も割合に多く、ホップといわれる

カラハナソウ、そのほかカナムグラ、エゾイラクサ、ホソバイラクサ、ミヤマイラクサ、アカソなどがあります。

目立たないがよく見ると面白いし、可愛いらしいと思われるものに、ミゾソバの花やイシミカワの実などがあります。タデ科の草花です。アキノウナギツカミ、タニソバ、イヌタデ、オオイタドリなどがこの仲間で、結構森の中に生育しています。

ナデシコ科の草花もかなり多くあり、ウシハコベ、ミミナグサ、エゾオオヤマハコベ、エゾカワラナデシコ、ムシトリナデシコ、マツヨイセンノウなどこのナデシコ科です。

キンボウゲ科では何といってもエゾトリカブトが第一にあげられますが、そのほかヤチブキで皆さんになじみのエゾノリウキンカ、それに似ているエンコウソウがあります。山菜としてフクベラの名で知られているニリンソウ、これはトリカブトと似ていて過って食べると大変なことになるってしまいます。サラシナショウマ、エゾノレイジンソウ、春早く花を開くアズマイチゲ、クロバナハンショウズル、キツネノボタン、オオヤマオダマキ、カラマツソウ、アキカラマツなどがあります。

変わったところではウマノスズクサ科のオクエゾサイシンがあり、ヒメギフチョウの幼虫の食草として知られています。

センリョウ科のヒトリシズカ、フタリシズカがあり今ではあまり見られなくなってしまったボタン科のベニバナヤマシャクヤクも帯広の森の地にかすかに生きているはずで。

オトギリソウ科ではトモエソウ、オトギリソウ、ケシ科のクサノオウ、エゾエンゴサク、ムラサキケマン、エゾキケマンがあります。

アブラナ科ではナズナ、タネツケバナ、コンロンソウ、ハルザキヤマガラシ、スカシタコボウなどがあります。

ユキノシタ科ではネコノメソウ、フユユキノシタ、バラ科ではヤマブキショウマ、オニシモツケ、エゾノシモツケソウ、キジムシロ、ミツモトソウ、オオダイコンソウ、ナガボノシロワレモコウ、キンミズヒキとたいへん多くの種があります。

マメ科では外来種のシロツメクサ、アカツメクサ、シナガワハギ、コメツブツメクサなどがあり、山菜として利用されるナンテンハギ、花の美しいクサフジそのほか木本になりますがエゾヤマハギの花も美しい花です。

フウロソウ科では、ゲンノショウコ、ミツバフウロ、エゾフウロなどが見られます。

ツリフネソウ科には、ツリフネソウ、キツリフネ、が見られます。

スミレ科は大変多くありますが見分けるのが大変で

す。スマレ、アカネスミレ、サクラスマレ、ミヤマスマレ、エゾノタチツボスマレ、オオタチツボスマレ、タチツボスマレ、ツボスマレ、オオバタチツボスマレなどと区分されますが区分してみると中々大変です。

秋に美しい花を咲かせるミソハギ科のエゾミソハギも大変美しい花です。

アカバナ科のヤナギランは大変美しく香りもよい花です。メマツヨイグサ（月見草といっています。）もこのアカバナ科です。

ウコギ科では山菜として有名なウドがあります。

セリ科は多く、セリ、ウマノミツバ、シャク、ヤブジラミ、ヤブニンジン、オオカサモチ、ホタルサイコ、ドクセリ、エゾニュウ、オオハナウド、エゾノヨロイグサ等々があります。

イチヤクソウ科では、赤いスズランなどといわれているベニバナイチヤクソウが見られます。

サクラソウ科ではクサレダマ、ツマトリソウ、オカトラノオ、クリンソウなどがあげられます。

リンドウ科は、フデリンドウ、エゾリンドウなどでしょう。

目立たない花々ですが、アカネ科のオオキヌタソウ、ヤエムグラ、カワラマツバ、クルマムグラ、ホソバヨツバムグラ、クルマバスウ等々と見られます。

ハナシノブ科のエゾノハナシノブもあったのですが今ではどうでしょうか、とても美しい花です。

水辺のエゾムラサキ、ワスレナグサなどはムラサキ科の花です。

シソ科は、ヒメナミキ、エゾタツナミソウ、ナミキソウ、コシロネ、シロネ、エゾシロネ、ナギナタコウジュ、クルマバナ、イヌトウバナ、ウツボクサ、オドリコソウなどがこの仲間です。

大型の花を咲かせるクガイソウはゴマノハグサ科です。シオガマギク、エゾコゴメグサなども同じ科の花です。

レンプクソウは一属一科でこれだけが生育しているものです。

オミナエシ科では、秋の七草の一つのオミナエシとオトコエシがあります。

キキョウ科では、キキョウは自然のままではなかなか見られなくなっています。バアソブ、ツルニンジン（ジイソブ）ツリガネニンジン、サワギキョウが見られます。

キク科は大変多くオオヨモギ、オトコヨモギ、ヨブスマソウ、ハンゴンソウ、エゾゴマナ、エゾノコンギク、ヤマハハコ、カワラハハコ、サワヒヨドリ、エゾノキツネアザミ、ヨツバヒヨドリ、エゾノサワアザミ、コウゾリナ、アキノノゲシ、ヤマニガナ、ヤナギタンポポ、エゾタンポポとまだまだ多い。

外来種も多く、セイヨウタンポポ、コウリンタンポポ、ヒメジョオン、ブタナ、オオバタクサ、セイヨウ

ノコギリソウ、フランスギク、オオハンゴンソウ、アラゲハンゴンソウ、アレチノギクなどの外、セイタカアワダチソウ、オオアワダチソウは始末の悪い外来種として考えていただきたいものです。

以上特に目立つような、割合に知られている花々をあげてきましたが、これらはすべて樹木や四囲の環境によって大きく変化するものです。

これからの森づくりの中で、そのことを充分考え、私達の生活が、自然と四囲の調和をはかり、お互いに生物同志の共存がはかれるよう、すばらしい環境の中で生活が楽しめるように工夫していくことこそが大切であろうと思います。

これからの帯広の森に対する想い

私達の街帯広、それを囲む帯広の森、帯広市は十勝の中心都市であることを思うとき、自然とのかかわりを大切に、帯広の森から防風林によって日高山脈へ、大雪山系へ、緑の帯がつながり、母なる河川の緑も、それぞれの山へ緑の帯を伸ばし、そこには青々とした木々が、美しい花が咲き、多くの生物が各々の生き方をして、人間と多くの生物が素晴らしいバランスを保って生きていく、そして共にその喜びを分かちあえる理想郷をめざして、色々な面で工夫し、実行できるものから実行して、着々と進めていくことが今私達に与えられている使命ではないでしょうか。

帯広の森100年の大計の20年が過ぎ、やっとその緒について軌道にのった所といえるわけですから、これからが大切だと思います。森林の単純化はさけ、適切な樹種と十勝の自然らしい、十勝の潜在植生を考えた森づくりの方向性をはっきり示さなくてはならないと思います。

帯広市のみの帯広の森ではなく、十勝全体の中の帯広の森と考えるべきであり、大きく言えば、北海道の十勝の将来を考えた帯広の森を指向していかなければならないと思います。

自然に人間がかかわれば、必ずその中に変化があります。随って自然と人間のかかわりの中で如何に調和をとっていくかが大切になってくるわけです。人と自然と共に生きていくための知恵は、よく理解し、知るところから始まると思います。一方的な見方や考え方は大変危険です。だから多くの人々の知恵を集め、多くの力を出しあっていくべきものだと思います。

初夏の燃えるような若々しいカシワの葉の色に、これからの発展をしっかりと見るような気がします。春早くオオバナノエンレイソウの純白なお花畑に、これから大きく発展する十勝の姿を見る気がします。帯広の森の更に大きく発展することを祈ってやみません。

§ 4 森と小動物たち

はじめに

森の本質は植樹した本数ではありません。どんな生き物が住める森か、つまり本質的に自然の豊かな森かどうかということへの価値は、この20年で大きく高まりました。それは残念なことに、周辺の自然の急激な衰退によって相対的に高まったものです。

しかしその「価値」に見合うほど、我々の「価値観」が成長しているとはいいい難いようです。

帯広の森造成計画書の「予想される動物目録」にそって現状と課題を述べたいと思います。

エゾシカ

数年に1回ほど、帯広の森に近い畜産大学や農業高校の敷地内での記録があります。

エゾシカはおもに樹林帯と草原とが適度に入り交じった環境を利用して、全道的に増加しているとされています。市街地周辺では帯広の森の面積を足しても樹林帯が少なすぎるといいます。しかし繁殖できないまでも、シカが頻繁に森に立ち寄るようになれば、交通事故、農作物被害、樹皮はぎなど、新たな問題を人間に投げかけるでしょう。

イタチ類

エゾイタチ、コエゾイタチなど北海道在来種が増加していれば、自然度は高いと評価できますが、記録はなく、ホンDOIタチもいません。ただし森に隣接する売買川ではイイズナ（コエゾイタチ）の記録があります。売買川にはこれらイタチ類の餌になるネズミ類の豊富な自然環境が残されています。ほかに1991年6月に運動施設区北側の調整池で、外国からの移入種のミ

ンクが観察されています。ここに小さな自然林を結んで流れる小川が池をつくっています。

これはこの様な環境が、動物のすみかとして優れているということと、ミンクが在来種の侵入の大きな障害となる可能性を示しています。ただし森全域での本格的なイタチ類の調査は行われていません。

キタキツネ・エゾタヌキ

どちらも自然と街を適度に利用して増加している動物です。タヌキは十勝では観察が少なく、森でも記録がありません。キツネは「野良犬より多い」という声があるくらい多く、エゾユキウサギの減少の大きな要因と思われるほか、シマリス、エゾリス、草原性の野鳥にとっても脅威です。しかし自然界ではネズミ類の個体数の調節に大きな役割を果たすといわれています。

一番の問題は人間活動が森の限界を超えるキツネを育てているのではないかということです。少なくとも、森の中や周辺（市街地も！）にゴミ（えさ）が放置されるきっかけになるものは置かないことが大事です。駐車場、ゴミ箱、売店などがゴミの発生源です。キツネの不自然な増加は、何よりもキツネ自身にとって不幸なことだと思います。

エゾユキウサギ

10年ほど前は住宅地でもたくさんの足跡が見られたのに、現在は限りなくゼロに近くなってしまいました。キタキツネの増加が大きな原因と思われますが、原因は一つではないでしょう。まだ森の中の見通しがよすぎるとか、森林の孤立化で個体の交流ができず、それぞれの緑の孤島の中で絶えるのを待つだけ、という状況になっていたことを見逃してはいけません。



キタキツネ



エゾユキウサギの足あと

1994年4月に運動施設区北側の調整池付近でウサギの足跡を再発見しました。ここは前述のように、自然林などのいい環境があります。しかしここは運動施設区なので、現在は東にゴミ箱のある駐車場付きのパークゴルフ場があり、将来は近くにレストハウスも建つ予定です。つまり、ウサギの生活には適さず、キツネを良く引き寄せてしまう場所になります。

まったくウサギには悲劇的な状態だと言えます。

しかしまだ、森全域での本格的な調査が行われていないので、他の地区にも希望を持ちたいと思います。

エゾリス

人口17万の街を在来種のリスが走るということは日本ではほとんどないでしょう。

森の調査でも、エゾリスの個体数は増加の傾向にあるようですが、巢のほとんどは背の低い植樹ではなく、昔からのカラマツの防風林にかけられています。植樹が育てば移動するでしょうが、何年かかってどれくらいの大きさになればリスが安心するのでしょうか？

エゾリスが帯広市内で多いのは針葉樹、特にチョウセンゴヨウの植栽が多いからだと考えられます。現在のところ、公園的緑地の充実とエゾリスの暮らしぶりには大きな関係がありそうです。でも、カシワ林だった時代にもエゾリスは住んでいたはずです。自然なエゾリスの暮らしぶりとはどんなでしょう？

市内で最も多くエゾリスを育てている森は、帯広農業高校の森です。ここは公園的な林と第一級の自然をもつ森が接触しています。リスたちは松の実のほか、クルミ、若葉、キノコ、昆虫、骨、樹液などを口にします。広い自然林の中なら人や犬猫に追いかけることも少なく、こんな自然林があった方が安定的な暮らしができそうです。

市内のリスの多くは、農高の森の出身と思われます。たとえば緑ヶ丘公園や帯広の森の数個体のリスは、その中だけではすぐに血が絶えてしまうでしょう。毎年



エゾリス

農高の森からの新しい個体の侵入が必要だと思います。それぞれの森に、ある程度の自然林とそこへ至る通路の安全の確保が必要です。

リスの交通事故などの問題も含め、人間は街の中にエゾリスがいることでいろんなことを考えさせられています。これは市民の財産ではないでしょうか。

シマリス (エゾシマリス)

売買川と帯広の森とが接するあたりに、シマリスが住んでいることを知る人はまずいないでしょう。シマリスは地上性の動物で、いくら大きな木があっても下が芝生では住めません。もし、売買川から帯広の森の中央部まで質のいい自然がつながり、道路横断の問題も解決すれば、定着の可能性も少しはあります。逆に最悪の場合は売買川の自然植生が護岸工事や草刈りで破壊されて、シマリスも絶滅してしまうでしょう。

また、ペットとして飼育されているものの多くは、大陸産の別亜種（チョウセンシマリス）で生態が異なるので、絶対に放獣してはいけません。

エゾモモンガ

いまのところ森での観察例はありませんが、畜産大学近辺に生息しているので、高木層の発達とともに、巣箱などで営巣場所を補えば将来的には十分生息可能だと思います。

ネズミ・トガリネズミ・コウモリ

ネズミやトガリネズミの種類や数は、自然環境の評価の指標ですが、その調査はごく一部の区域で実施したに過ぎません。トガリネズミについては近隣の自然林よりも相当少ないと考えられます。これが全体的にはどうなのか、今後どの様に変化するのか、継続的に調べる必要があります。

コウモリの調査は行われていませんが、筆者は6月末頃から上空を飛翔する個体を観察しています。これ



エゾシマリス

も巣箱などを工夫することによって営巣場所を増やすことができるでしょう。食料は飛翔する昆虫です。

両生類・は虫類など

は虫類については観察例がありません。

両生類ではサンショウウオの観察例はありませんが、地理的条件から見て可能性はあるので北向き斜面を中心に探してみたいと思います。唯一観察されているのはエゾアカガエルだけで、繁殖地は主に運動施設区北側の調整池の南北の自然林と周辺の湿地です。芝生化されたところにも水がしみ出ているところには産んでいました（その後、乾燥してしまいましたが）。

また、運動施設区の東側の19線川沿いは谷地坊主なども残る場所がある環境なのに記録はありません。

昆虫についてはトンボが7種類（調整池）という記録しかありません。

まとめ

帯広の森の周辺環境は悪化し続けています。自然は分断され孤立化し、街に囲まれ、水分は抜け、植生は単純化され、生き物たちは疲弊し、そのバランスは崩れてゆきます。それがウサギとキツネの関係で表面化してしまったわけです。

このように動物たちの状況はあまり良くありません。今は増えつつあるとされるエゾリスも、百年後、木は大きくなったのにリスはすでに絶えました、ということは十分ありえます。農業高校の森がいくら環境が良くても、ここ単独で百年リスが保つでしょうか？これが自然からみた開拓や開発の歴史であり、現実のエゾユキウサギたちの身にも降りかかったことなのです。

では今後森をどうしていったらいいのでしょうか。

自然への価値観の上昇を踏まえて、全体のデザインを練り直し、自然環境を保全・拡大・復元する核の部分、自然そのものを利用・学習し直接楽しむ部分、自然の中で文化・スポーツ・レクリエーション活動をする

部分のバランスを整え、それぞれの場所に適した自然環境の向上策を打ち出す必要があります。

そのための問題点を提起してみたいと思います。

①基礎調査：森の全体的な調査や手本とするべき自然林の調査が少なく、自然としての帯広の森の将来像はもちろん、現在の全体像も見えないのが現状です。

②体制の問題：帯広の森に関して数多くの調査報告書、提言書が出されています。しかしその技術的、専門的な内容や思想を、現実の森づくりに生かせるような、専門家や技術者が活躍できる組織ができていません。たまに偉い先生を呼んできて、ためになる話を聴いても、森をつくるのはやっぱり自分たちです。

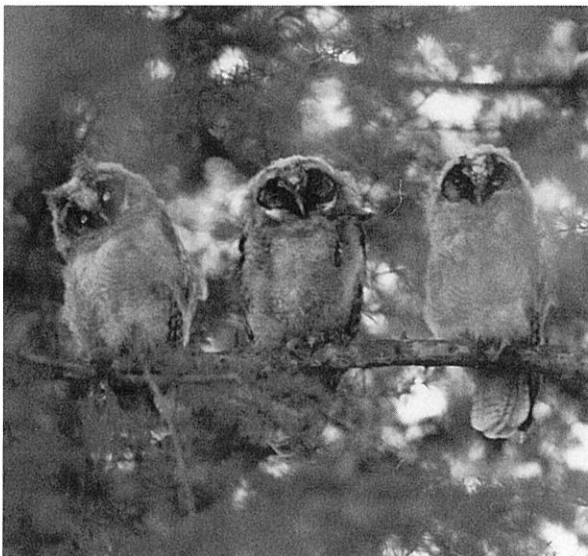
③区割りの問題：調整池周辺の自然林（第2柏林台川沿い）が小動物には重要な環境だということがわかってきましたが、ここは運動施設区になっています。

自然林を残すだけでは小動物は住めないし、この林も衰退するでしょう。この区割りは（区割りという考え方も含めて）いかにも十勝の開拓者の発想です。それを改めるところに帯広の森が登場したはずですが。例えば運動施設区でも街づくりのモデルケースになるような、生きものとの理想的な関係を表現した環境づくりを試みて欲しいものです。

④分断の問題：市内では森同志を分断して何本も太い道路や住宅地が横たわっています。これでは森個々を良くしていても全体的には無力化されてしまいます。街路樹だけではどうにもなりませんし、森で生きものを増やして道路で轢き殺すなんて最低です。

重要部分では道路のトンネル・シェルター化や橋化など、大胆な方法で自然のつながりを保って欲しいと思います。

⑤活動の問題：私たちは自然があたえてくれる感動のうちの割も、森で発見できていません。自然と人間との関わり方にはどんなものがあるか、それは森とつきあうことでしか発見できません。自然の素晴らしさ面白さを発見するための活動が、今の帯広の森には



トラフツク巣立ヒナ



アカゲラ

最も足りないように思えます。

開拓の歴史によって、私たちは生活感の中の自然を喪失しています。帯広の森の成長とともに心の中の自然＝自然観も成長しなければ意味がありません。いままでは私たちの粗末な自然観は、自然を粗末にあつかってきました。帯広の森の自然としての未熟さは、私たちの自然観の未熟さをはっきりと映しています。いまこそ私たちはそれに気づき、新しい時代に必要な自然観を育てる必要があるのだと思います。

生きものたちとの帯広の森

ちょっと暗い話になってしまったので、最後に夢を描きたいと思います。

森の南側、売買川から腕のように北側に密度の高い森が伸びています。ここではこの地域の自然植生を再現する実験と研究を行っています。地面を掻き起こして木の種子を定着させたり、表土や樹林の移植実験を行い、森や林床植生・野の花の再生、動物の定着を研究しています。環境に応じてこの様な場所が森の数カ所にあり、研究成果は森の他の部分や、他の地域の自然復元事業に生かされます。

むかし苗圃だった地区を中心にカシワ、ミズナラの雑木林がつくられています。雑木林を楽しんで育て、利用し学ぶ文化の創造を行います。

第2 柏林台川と19線川はやや曲線化され、乾燥しかけた湿原には水を供給し、湿原の花が復活しました。水域はカエルや水生昆虫の繁殖地になっています。

運動施設区には意外なほどたくさんの生きものが訪れます。これは19線川と第2 柏林台川沿いに帯のように林が復元され、両側から施設区内の各所に配置された小さな林に訪れるからです。時期によっては1日で40種程も見られる野鳥やクルミを食べるリスのかわいらしさ、林床に根づいたエンレイソウやスミレなど、季節の野の花の可憐さに競技場を訪れる各地・各国の選手も試合を忘れてリラックスです。



クマゲラのエサ場

施設区の中を縫うように流れるせせらぎには、なんとニホンザリガニが見られます。夏になると照明に集まるクワガタを求めて親子づれがよくやって来ます。

車道が数カ所シェルターのようなものでおおわれ、その側面や上部が緑化されていたりして、自然の接続が試みられています。その他に地上の生きもののためのトンネルや橋などが随所に発見できます。また、路線バスやシャトルバスが強化され自家用車に頼らなくても来ることができるようになります。

調整池のまわりは、岸を歩ける踏み石が何カ所か設置される他は、周囲数メートルは草刈りをしていません。斜面の上部には芝生が残され、カモの雛を遠くに見下ろしながら、くつろぐこともできます。池の下流にはカワセミの営巣できるブロックが設置され、ちょっとしたバードウォッチング名所になるため、落ち着けないうちも知れませんが…。

西側では大きな湿原がつくられ、子供がいくら網を振ってもトンボが尽きることはありません。春にはカエルの大合唱、夏にはカワセミやアオサギ・ホタル、秋には水鳥たち、冬にはネズミを狙ってイイズナやノスリ、氷の上を横切るウサギの足跡も観察できます。

また、カシワ以外の落葉広葉樹林を育てている林ではカエデやカツラなどの美しい紅（黄）葉や、キノコ狩りなどが楽しめることでしょう。

森の学校では森の自然情報の発信や、自然環境、公園の直接的な管理、森を舞台とした環境教育が実践され、自然に関わるボランティアたちの活動に必要なノウハウなどの情報提供や交流なども行われます。

植樹祭のかわりに自然復元や管理、市民活動、遊び、利用、環境教育など官民主催のさまざまな活動が森の内外で盛んになり、それは街のまわりの他の活動にも波及するでしょう。これこそが文化の発展です。

どうですか、これをお読みのみなさん、私たちと一緒にいい夢を見てみませんか？（おわり）



冬の自然かんさつ会

§5. 森と遊ぶ人たち ―おびひろブルーグラスコンサート開催実行委員会―

「森と土と水のコンサート」

1. コンサート開催への道のり

帯広の森市民植樹祭とともに開催されてきたブルーグラスコンサートは、昭和58年5月15日開催された第9回植樹祭に始まります。

この第9回市民植樹祭で何かイベントを開催したいという有志の集まりは、市予算編成たけなわの昭和57年12月から昭和58年4月にかけて開かれました。

帯広の森市民植樹祭。「祭」とついていながら何か祭りらしくない。

祭りに音楽は付き物。

もっと賑やかに、もっと楽しく、植樹祭に参加した市民が楽しめるような、北国の春を祝う祭りにしたい。

植樹祭の理念や、市民の手作りで進められる帯広の森にマッチしたものをいうことを中心に、集いに参加したメンバーによる、大変熱い議論が繰り広げられました。

「森を育てるのは、土と水」です。

この土と水のように、帯広の森づくりの土台となれるような音楽イベントを作ろう。

そして、帯広・十勝のイメージに合い、池田町などの音楽イベントで十勝に根づこうとしているブルーグラスコンサートを開催したい。

このような結論を得るまでに約3ヶ月の議論を重ねました。

「森と土と水のコンサート」というイメージコンセプトは、こうした議論を経て決定され、平成6年の今日まで受け継がれています。

2. 初代実行委員会

当時はまだ、ブルーグラスという音楽ジャンルがどのようなものか分かっていたのは、集まったメンバーの中でも僅かの人達ではなかったかと思います。

十勝農協連に勤務されながら、このブルーグラスジャンルのバンドを編成し活躍されていたのが、後に、実行委員長となった市川雄樹さんです。

この市川さんにブルーグラス音楽の歴史や、十勝での活動状況、音楽テープなども聞かせていただきながら論議は進められました。

そして、十勝ではまだマイナーなジャンルでしたが、十勝の牧歌的な景観にマッチしたブルーグラスのコンサートを帯広の森市民植樹祭で開催し、植樹祭に花を添え、また、地域で活動しているグループの応援もしようということを当面の目標に、初代実行委員会が組織されました。

□初代実行委員会（敬称略）□

実行委員長	市川雄樹				
会計幹事	川島健治				
委員	和田義照	関寛			
	若生明美	松浦勝範			
	野原昌子	合田隆司			
	長坂徳子	三野経弘			
	作間勝彦	及川健一			
	平林英明	堀稔			
	野崎信一	松島勝巳			
	山本雅雄				



昭和58年ブルーグラスコンサート（第1回）
第1回の実行委員会のメンバー



3. 実行委員会のその後

第1回コンサート開催実行委員会のメンバーを核にして、実行委員会の体制も徐々に充実してきました。市川委員長の海外留学に伴い、実行委員長は改選となりましたが、ミズメークインコンテストで選ばれた、女王と準ミズにも実行委員としての委嘱状が交付され、実行委員の若返りや、女性の参加も得、益々賑やかで活気にあふれた実行委員会となっています。

過去に参加いただき、結婚・転居などの理由により実行委員会から卒業？された会員もいますが、ここでは、平成6年度、第12回コンサート開催実行委員会の名簿を掲載いたします。

□第12回コンサート実行委員会名簿□（敬称略）

顧問	市川雄樹	
実行委員長	加藤博之	
副委員長	大谷悦子	
	酒井隆幸	
幹事長	成澤靖幸	
副幹事長	星久保吉正	
会計幹事	川島健治	
委員	及川健一	
	野崎信一	杉山悦子
	鈴木隆	井関渉
	渋谷洋一	上田雅史
	阿部文香	宇佐美裕子
	小枝佳代	鎌田哲也
	立花吉典	佐藤純子
	長畑邦浩	早川宏之
	藤田努	古沢暁子
	山本雅雄	合田隆司

□これまでに委員会に参加された方□（敬称略）

渡辺佳哉・大西孝尚・渡部喜久子・近藤ゆかり
伊藤昭廣・稲田茂・松浦ゆかり・早津由美子
鈴木克昌・村田正之・北川誠司・杉野幹夫

4. コンサート参加バンド

ブルーグラスコンサートには、過去、地元バンドはもとより、札幌・東京などから多くの皆さんの参加をいただきました。

森のコンサートを楽しみにされる方、十勝の風土がすっかり気に入って、必ず参加すると宣言される方など多くのファンに後押しされ、ハイレベルなコンサートが開催されるようになってきました。

これまでのコンサートへの熱烈な参加に心より感謝し、ここにグループ名のみ（個人参加のみ個人名で）掲載させていただきます。

- 第1回 ☆スーパードライブ
 - ☆長命庵
 - ☆クレイジーモーモーズ
 - ☆カントリー
- 第2回 ☆長命庵
 - ☆ジャックインザボックス
 - ☆シティーリミッツ
 - ☆グラスランドファーマーズ
 - ☆神渡星
- 第3回 ☆ジャックインザボックス
 - ☆松山あきひさ
 - ☆ゆげポップ
 - ☆シティーリミッツ
 - ☆市川バンド
- 第4回 ☆ナイトライダーズ
 - ☆酪農大学ブルーグラス研究会
 - ☆ブルーグラスサミット
 - ☆市川バンド
- 第5回 ☆ダンスバンド
 - ☆サップロボ土豆園
 - ☆市川バンド
- 第6回 ☆サウザンドリーブス



平成2年
ボストン
スタッフジャンパー
アンサンブル



- ☆北大オールスターズ
☆市川バンド
- 第7回 ☆ノースマウンテンボーイズ
☆千葉 真
☆市川バンド
- 第8回 ☆北大ブルーグラス研究会
☆市川バンド
- 第9回 ☆北大ブルーグラス研究会
☆アコースティックキャッツ
☆グラスランドファーマーズ
☆西 英里子
- 第10回 ☆ボストンアコースティックアンサンブル
記念コン ☆北大ブルーグラス研究会
サート ☆千葉 真バンド
☆市川バンド
☆西 英里子
- 第11回 ☆大江戸グラスセッション
☆千葉 真バンド
☆グラスランドファーマーズ
☆西 英里子
- 第12回 ☆大江戸グラスセッション
☆千葉 真バンド
☆北大ブルーグラス研究会
☆西 英里子

5. 広がるイベント企画

第1回コンサート開催に向けた実行委員会の回数を重ねるうちに、コンサートだけではなく、各種のゲームやバザーを用意し、家族連れや子供達の参加者も楽しめるイベント企画をしようという機運が盛り上がってきました。

また、回を重ねるごとにイベント企画も充実し、現在では、大変多くの催しが行われています。

このイベント企画と実行には、「北海道造園建設業協

会十勝支部」の皆さんのご支援をいただき、実行委員会名簿には掲載されていない、多くの方々の参加協力もいただいています。

□フォークダンスフェスティバル□

催事の中でも最も必要とされ、ブルーグラスの音楽につきものなのがフォークダンスです。

せっかくの野外音楽コンサートです。

これを盛り上げようということで、「帯広フォークダンス協会」の皆さんの参加協力をいただき、フォークダンスフェスティバルも開催されることになりました。第1回目のコンサートでは、ジェンカを踊る子供達や、お父さん・お母さんの長い列ができました。

□ミズメークインコンテスト□

もじどおり植樹祭に花を添えるイベントが「ミズメークインコンテスト」です。

このコンテストは、「5月の女王」選びをするものですが、帯広・十勝で生産される「じゃがいも」の「メークイン」ともかけて、「いもの女王」選びという一風変わったコンセプトもありました。

このため、女王と準ミズには、大正農協生産のメークイン10キロづつが贈られることになり、最近では、東京ディズニーランドご招待という大変豪華な副賞も贈られるようになっていきます。

年齢・既婚・未婚は問わず、自薦・他薦・会場からの飛び入りも可能と、植樹祭の野良着が似合う女性を選ぶ、大変楽しいミズコンテストです。

☆ミズメークイン☆（順不同・敬称略）

金田真紀・漆原志織・村居美奈子・奥泰江
木呂子広美・吉岡ひろみ・武安德子・後神幾子
安中恵美子・木幡史絵・古沢暁子・北村和永
根本香須美・山田真由美・鈴木千尋・宇佐美裕子
阿部悦子・佐藤純子・早津由美子・伊藤香織
瀬谷真寿美・石原由美子



前年のミズから今年のミズヘタスキ（平成3年・第9回BGC）
フォークダンスフェスティバル



□元祖“長靴飛ばしゲーム”ほか楽しい企画□

春の一日を家族連れで楽しんでいただこうと、楽しいゲームコーナーも数多く企画されました。

ゲームのコンセプトは、植樹祭に参加する道具類を利用することにこだわってみました。

なかでも、長靴飛ばしゲームは、目標の一番近くに長靴を飛ばす大変ユニークで、植樹祭ならではのゲームです。このように長靴を飛ばすゲームは、近年、道内のイベントでも見られるようになってきましたが、私達の取り組みが元祖ではないかと思っています。

このほか、植樹祭に持参したスコップを利用し、一分間にどれだけ深い穴を掘れるかを競う穴掘りゲームなど、多くのゲームが実行委員のアイデアにより企画・開催されています。

ゲームの中には、第1回から現在まで継続しているものや、一度で終わってしまったものもあります。

ここでは、第1回以降、実行委員会で取り組みを進めたゲームを全掲いたします。

- ☆穴掘りコンテスト
- ☆めん羊さんとあそぼう広場
- ☆丸太ころがし競争
- ☆人間ばんば競争
- ☆熱気球試乗
- ☆つむじゲーム
- ☆丸太切り競争
- ☆生き残り丸太ゲーム
- ☆ホーストレッキング

□バザー～十勝の農産物を食べる□

植樹祭では、十勝の味覚を楽しめるバザーも実施しています。

実行委員が前日から作ったイモダンゴ・カボチャダンゴや、当日朝7時から実行委員会の面々が皮をむいて茹でた、ほかほかの大正メークイン・ゆでとうきび・豚の丸焼き・ソーセージなどが販売され、さらに、風船や参加記念Tシャツなどの販売も行われてきました。

□企業の支援□

コンサートの開催・イベントの実行に当たり、地元企業を始めとする多くの企業の皆さんから、物心両面に渡るご支援をいただけてきました。

これまでのご支援に心より感謝するとともに、今後の帯広の森ブルーグラスコンサートに、これまでも増してのご支援をお願いいたします。



平成2年 第8回BGCバザー風景

6. 盛り上がる前夜祭

帯広の森ブルーグラスコンサート開催10周年を記念して、第10回コンサートには、本場アメリカから「ボストン・アコースティック・アンサンブル」の皆さんをお招きしました。

記念事業を検討する実行委員会では、本場プレイヤーの招へい公演となることから、多くの市民にブルーグラスミュージックを聴いてもらい、多くの市民にブルーグラスの良さを広めたい。10周年記念事業としても取り組みたいという論議が積み重ねられ、早速前夜祭開催に向けた取り組みが始められました。

短期間の準備でしたが、快く会場提供いただいた勝毎ホールを会場に有料開催にもかかわらず250名の参加者を得て、ステージ・会場一体となった賑やかで楽しい前夜祭が開催されました。

以後、植樹祭前日には、必ず前夜祭が開催され、参加アーティストによるコンサートが開催されています。

第10回コンサート前夜祭

参加者250名 会場：勝毎ホール

第11回コンサート前夜祭

参加者150名 会場：サラダ館

第12回コンサート前夜祭

参加者150名 会場：レインボーヴィレッジ

出前コンサート 会場：長崎屋多目的ホール

7. ブルーグラスコンサート2001

帯広の森ブルーグラスコンサートは、多くのアーティスト・関係者の皆さんの手弁当により開催され、今や、帯広の森市民植樹祭には、なくてはならないコンサートに育ってきました。

帯広・十勝にこの音楽を根づかせ、地域で活躍しているグループを応援したいという当初の目標は未だ達成されていませんが、市民植樹祭とともに百分の一回ずつを積み重ね、ブルーグラスコンサート21世紀への歩みは限りなく続きます。



平成5年 第11回BGC生き残り丸太ゲーム

§6. 森と親しむ人たち —「帯広の森」を地域イメージづくりの核に—

帯広の森と帯広デザイン振興協議会

「帯広の森」は、都市部と農村部の「接点＝際」森のデザインから帯広・十勝の生活文化を考えてみました。そこから「何か」が見え始めます。都市と自然が共生する地域イメージづくりのワークショップを行ったのは何年前だったのでしょうか。

「'89年デザインイヤー」の年。まだデザイン後進地域であり、デザインパワーが認知されない当地帯広において、なんでもありのデザインに目覚めたデザイン集団が集結、全道で初めての「デザインフェア in おびひろ」＝通産省が選定したGマーク商品の巡回展と、帯広デザイナーズ協会が主管する「デザイン収穫祭」のドッキング事業を開催、大成功をおさめました。

この「イベント」を通じ、「何か楽しく遊べることないかなー」みたいな雰囲気の中、「帯広デザイン振興協議会」というデザイン集団が旗揚げされ、通産省の外郭団体である財団法人日本産業デザイン振興会が唱える「デザインワークショップ事業」の受け皿になったのです。

「デザインワークショップ事業」は、全国で3都市が通産省の地域指定を受け、地域が主体となり、地域の魅力づくりをデザインを通じ考え、地域の特性に根ざしたランドデザインの構築を推進するための研究事業であり、帯広市の研究テーマを先に述べた「都市と自然が共生する地域づくり」とし、帯広の森という地域特性を切り口に、「帯広らしさ」を求めた地域デザイン戦略の研究を行うものであります。

今では、「ワークショップ」は日常の用語として浸透していますが、当時はその手法も確立しておらず、帯広の森の構想段階から携わってきた名古屋市在住の牧野道幸氏の講演や、実際に「森」の中を歩き回る体験ツアー、パネルディスカッション等を行い、その過程での情報発信を通じ、地域住民が森とどのように親しむのかを提案しました。

「デザインワークショップ」の概念（112頁 参）とその提案内容について申し上げます。

(1) 色・音・光

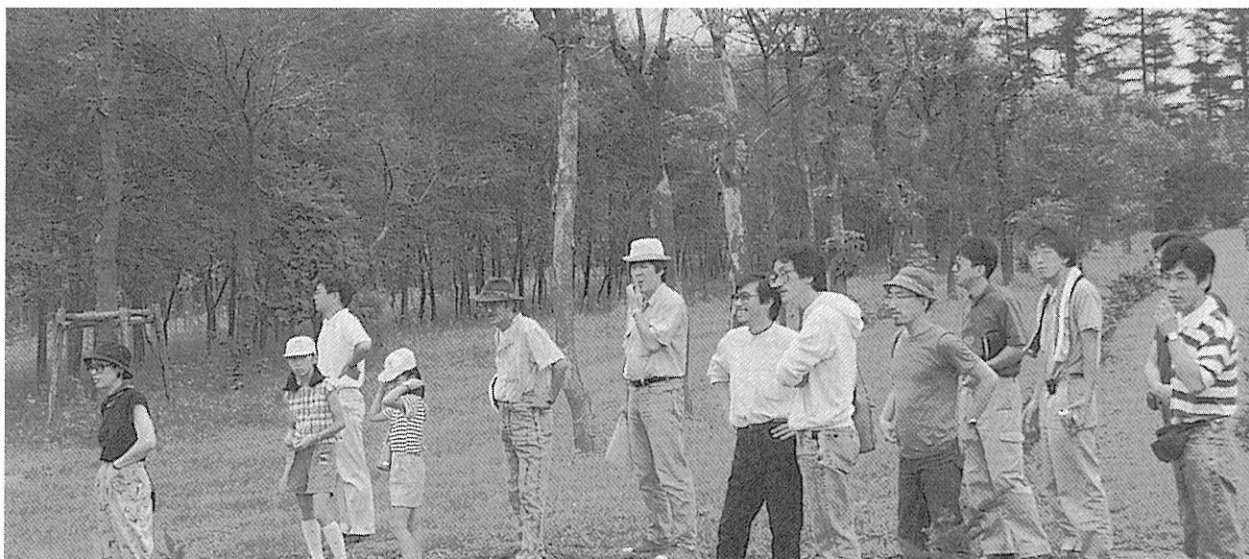
「色・音・光の会議」では、まず「色」ですが、帯広・十勝地域は、北海道全体や他の北方圏諸国と比べても、はるかに植物の量や種類が多く、これら自然のもつ特徴の再認識と、地域の素材との関係を考慮しながら、基本の色彩を自然から採取することから始め、これらの風景、四季、大地などのデータをもとに、基本となる「色」を抽出、色調や補色などを中心に検証しました。

今回はテストケースとして、十勝の多彩な「緑」を象徴するような黄金色の緑の葉を持つ「ゴールドニセアカシア」から提案色をイメージしました。このアカシアの色には、温かい自然のやさしさが感じられます。

（この提案色は、後ほど述べます「森の電話ボックス」に使用しております。

この提案色とした「ゴールドニセアカシア」は、
①帯広の森の圃場 ②帯広畜産大学の前庭 ③白樺公園 ④西南大通りの東地区等で育ております。

次に、「音」ですが、「帯広の森」を音でイメージ



デザインワークショップ

した森のBGM「萌黄色の妖精たち」(作曲:小枝伸輔氏)を作成いたしました。夏の森にとってもよく似合う、澄んだハーモニーによって、帯広の森を耳で見るイメージをふくらませてくれます。

(2) 造・形

「造・形の会議」では、帯広広葉樹高度利用技術開発研究会(会長:山本利秋氏)の協力により、帯広の森の中に、「電話ボックス」を設置いたしました。

この電話ボックスは、風の音、小鳥の音、草木の香りを聞きながら電話をプッシュしてもらうため、四方は扉のない開放的デザインです。内部の床は少し高めとし、会話の弾むベンチがわりのものです。

又、電話ボックスには「森の案内板」もつけられ「梟」は森を愛する神様であることから、魅力的な漆塗りのガイドを兼ねた案内板を取り付けました。

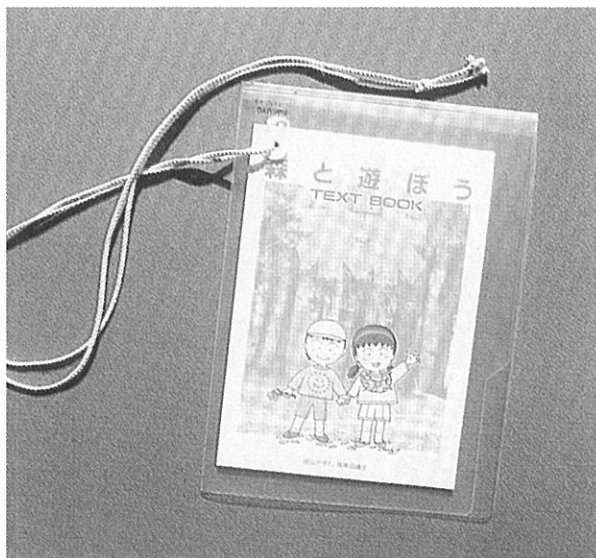
この電話ボックスは、帯広の森の運動施設区「帯広の森研修センター」近くに設置してあります。

(3) もてなし・飾る

「もてなし・飾るの会議」では、人が森に集い・遊び・学び・食えること、この4点をテーマに、帯広の森という「親しむステージ」をデザインしました。

まず、「食」のデザインですが、ブラジルのシェラスコ料理が「もてなしの料理」であることからヒントを受け参考とし、帯広の森で食べる、森ににあいの料理、野生味たっぷりの肉料理「北のシェラスコ」(提案者:長屋 壮重氏)を開発しました。

この南国生まれのシェラスコを北国の十勝・帯広の風土にあった「北のシェラスコ」として生まれ変わらせるためには、地場の産物をより生かし、タレなどにも一工夫が必要でしょう。



森と遊ぼう
テキストブック

帯広・十勝の名物料理として「北のシェラスコ」が定着する日、その時「帯広の森」の緑も、もっと繁みを増していることでしょう。

次に提案したのが「森の帽子」です。この「森の帽子」は、先の提案色の活用によるもので、チロリアンハット風のものです。「帯広の森」を育ててくれる人々へのプレゼント。子供からお年寄りまで、この森を大切に管理し、親しむ人々＝「新森林種族」たちへの優しい贈り物です。

ぜひ森の少年隊や、(仮称)森のシルバー隊にかぶっていただきたいものです。

TEXT BOOK

「森と遊ぼう TEXT BOOK」ですが、都市と自然との境界ができ、自然とのふれあいができにくくなっている近年、帯広には森を残そう、森を生かそうという数多くの市民活動があり、その大切さを帯広の森を通して伝えてくれています。帯広デザイン振興協議会は、「帯広の森」を更に楽しく、親しみ遊ぶことのできるよう、幼児や小学生低学年を対象として、TEXT BOOK を作りました。内容としては、クローバーのくじひき遊び、タンポポの指輪と冠、ドングリのネックレス、ペンペン草のジャラジャラ、バラと草のジャラジャラなど、昔の遊びが満載です。

デザイン振興協議会は、「帯広の森」という地域特性を生かし、いろいろな提案を行ってきましたが、まだまだ未成熟であります。このワークショップを通じて、地域の人たちに森の魅力を考えてもらうための、一つの材料になってくれれば有り難いし、更に大きな運動体として継続することが、我々の責任と使命であることを会員一同再確認し、今後とも「帯広の森」と親しむための提案活動を続けて参りたいと思います。

帯広デザイン振興協議会の活動に「END」はありま



せん。まして、年々「森」の輪＝「仲間」はひろがってきています。

帯広の森と社会教育推進委員会

帯広市社会教育推進委員会は、各小学校を単位に25の地域で活動を行っています。その中で、帯広の森に隣接する「大空小学校地区社会教育推進委員会」の皆さんは、昨年「大空・帯広の森自然ふれあいマップ」を1年がかりで作成しました。このマップは、森の散策コースや野鳥の種類、木々の種類など、大空地域と帯広の森の自然をことこまかにマップにしました。

まさに、地域手作りの「マップ」です。この「マップづくり」は、①地域の人々が改めて自分の地域を見つめ直すことにより、住民意識の変革を促し、②子どもからお年寄りまでが、自然を散策し、③地域の宝物を発見、④「マップ」を通じデザインマインドが生まれます。そして、⑤大空小学校の教材として利用され、⑥再び地域を愛し、親しむこととなりました。

このプロセスが大切であり、このことが地域づくりの基本です。

そして、帯広の森と親しんでいます。

帯広の森と市民スポーツ

これまでは、帯広デザイン振興協議会の帯広の森に関わる活動について述べてきましたが、少し「森」とスポーツ活動、特に運動施設区には、陸上競技場・体育館・アイスアリーナ・スピードスケート場・野球場・研修センターなど体育施設が集積されており、帯広市のスポーツ活動の中心となっています。

でも、森の中に「パークゴルフ場」、そして「歩くスキーコース」があります。この2つの概要をご説明します。森のプレイスポットとして利用されています。

①帯広の森とパークゴルフ

今、子供からお年寄りまで爆発的な人気のスポーツといえば「パークゴルフ」。帯広の森の中に3コース（平成6年12月現在）が造成・整備されています。帯広の森の中には、

- ・帯広の森パークゴルフコース（南町南9線45）
- ・帯広の森運動公園パークゴルフコース（芽室町北伏古東6線4）
- ・帯広の森パークゴルフふるさとコース（空港南町南10線38）

いずれも18ホールですが、3つのパークゴルフコースがあります。

パークゴルフは、既存のスポーツとは違い、年齢や体力で極端な差が生じないことから愛好者が増加し、生涯スポーツとして高い評価を受けています。

4月下旬、帯広の森はいっきに草木が新緑に染まり、厳しい「冬」の寒さを耐えぬいた人々のパワーが全開します。小鳥たちのさえずりの中で気軽にパークゴルフを楽しんでいます。

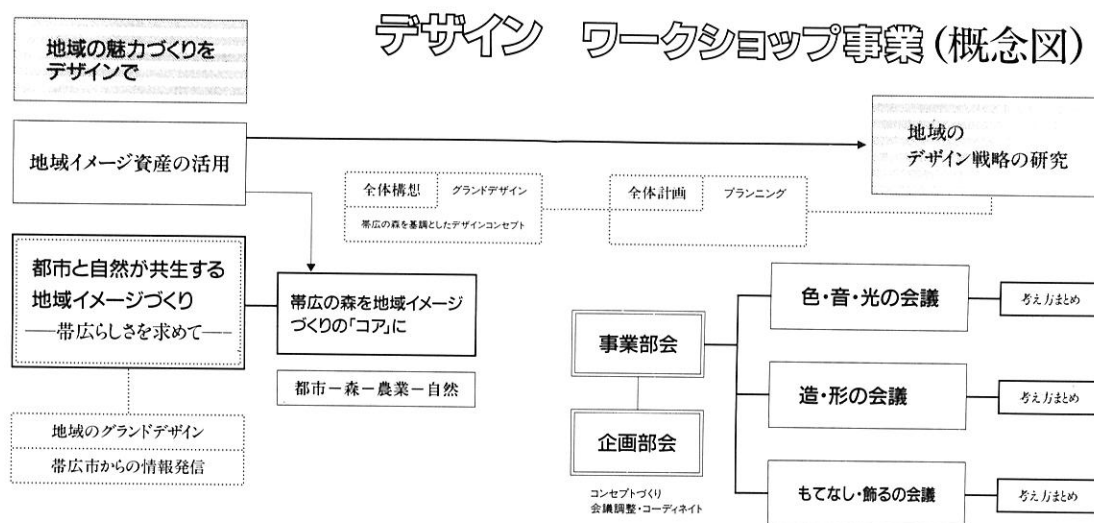
また、秋には枯れ葉の落ちたコースでのプレーもまた格別です。

②帯広の森と「歩くスキー」

パークゴルフが「春」から「秋」にかけてのスポーツとすれば「冬」のスポーツは「歩くスキー」。

帯広の森が真っ白な「雪」におおわれ、厳しい寒さの中で、白い息とほとばしる汗をかいている人が森の中にいます。

（通称）歩くスキー＝クロスカントリースキーの愛好者の皆さんです。帯広の森野球場の東側（自由ヶ丘側）に、帯広の森クロスカントリースキーコース（スキーコース5km）があり、冬の平日でも愛好者の車でいっぱいです。



歩くスキーは、水泳と同じように全身運動で、自然の中での運動は、ストレス解消や肥満にも効果があり、また自分の体力にあった運動ができることから、年々愛好者が増加しています。

帯広市の歩くスキーの歴史は、20年といわれていますが、昭和56年に歩くスキー協会が発足し昭和62年には帯広歩くスキーの会（現在：帯広クロスカントリースキークラブに名称変更）がスタートしました。

歩くスキーの魅力は、積雪を踏みしめ、自然に深く分け入り、自然との親しみと出会い、その心の感動にあります。

自分の家に留まりがちな「厳しい冬」。帯広の森のスキーコースで家族づれで外へ飛び出し、厳しい寒さにチャレンジしています。

— 新たな「チャレンジャー」のために —

森の中の「パークゴルフ」や「歩くスキー」に関するお問い合わせは、帯広市文化スポーツ振興財団屋外施設管理事務所（事務所は帯広の森野球場内）で受け付けています。



森を音で イメージする

森のBGM作成

萌黄色の妖精たち

作曲 小枝伸輔

BALLAD

S. Koeda

slow

Nov. 1990 KAF

§7. 森のイベント

(1) 模擬議会からトテッポまで

帯広の森市民協議会が設立され、森づくりへの市民の担い手の橋頭堡ができた。帯広の森づくりに関わる様々な運動を視点の核に定め、帯広・十勝の地域づくりへの夢を現実とすべく、理念の充実と、運動体としての機能とが動き出した。

帯広の森模擬議会

帯広の森市民協議会が、最初に行った事業である。昭和49年4月に首長の突然の交代によって、森づくりへの市の対応が心配されたのと、市民に帯広の森を広く知ってもらうことを目的にして行われた。6月より事務局を中心にして、市当局、市議会との打合せを行い、両者の協力を得ることができ、8月17日(土)午後1時より約3時間にわたって勤労者福祉センター大ホールで開催された。質問者を、一般新聞紙上によって、8月3日～10日まで公募したところ、16名の市民の希望者があり、事務局でこれを8名に絞りこんで、模擬議会で質問、もしくは自分の意見を表明してもらうことにした。

模擬議会の市よりの出席は、新市長田本憲吾、助役、都市開発部長、同部次長、帯広の森事業主管、公園緑地課長等であり、市議会からは会派を代表して、自民クラブ、社会クラブが出席し、公明党からはメッセージが送られてきた。模擬議会は、帯広の森市民協議会に参加する市民によって全て運営され、議長も質問者も市民であるが、答弁するのは、市理事者であり、市議会議員はオブザーバー参加であって、傍聴人として出席し、模擬議会の終りに講評だけをするということであった。

市民による主たる質問を紹介する。(質問順)
太田昇(公務員)

- ・生活生産の環境整備としての森の意義
- ・市民参加と森づくり
- ・吉村市政と田本市政の都市計画の相違点
- ・中国の緑化と帯広の緑化

大橋輝己(大学生)

- ・鹿島町(自分のふる里)のまちづくりと帯広のまちづくり、管内町村との関係
- ・市民参加のまちづくり

富田正一(園芸家)

- ・買収した森用地の利用プランで市民菜園を
- ・薬草園、草花園、昆虫採集のできる森づくり

前田恵美子(主婦)

- ・森をパラメーターとして福祉と市民の学習の場

- ・生産する福祉施設をつくり母子家庭の主婦採用
- ・少年少女森林警備隊あるいはGREEN CLUBの創設

国田千恵子(看護婦)

- ・森の遊びについて
- ・健康と森(士幌町の健康福祉を例に)

宮本博至(帯広青年会議所)

- ・都市計画と宅地のスプロール化
- ・市全体予算
- ・市民の自由空間の確保と規制の排除

金沢耿(チーム・グローバル・アーバン)

- ・まちから森へのアプローチ
- ・市内の他の都市公園との関係

これらの質問のあと、会場に参加している市民からも質問が出され、それらの質問について、田本市長を始めとして、帯広市の担当者が答弁をした。田本市長は、最後に「模擬議会で出された意見を、これからの森づくりの中で生かすよう検討したい」と延べた。

当日の一般参加者は約50名であったため、市民の森づくりへの関心の盛り上げがこれからの課題との批判も聞かれたが、帯広の森市民協議会ではこれから50年100年もかけるまちづくりの大事業だからこそ、無理な運動のための運動はしない。地道にじっくりとこの運動に取り組んでいくとの決意を新たにした。

中央公園シンポジウム

帯広の森市民協議会は、設立の立ち上がり事業としての模擬議会をやり遂げ、日常的な活動としての会員募集と、資金集めを始めた。

その頃、市内の中心部にあり、帯広で最初に開校(明治29年)した帯広小学校の移転改築に伴い、その跡地を公園とする構想が、前年よりあった。市内の一等地に十分な面積を有する土地が他にないことから、一部の市民に他の用途利用、もしくは売却という話もあった。帯広の森市民協議会は、市の外縁部に帯広の森が、ひとり、広大な大規模公園としてあるだけでは、田園都市としての帯広のまちづくりは、豊かなうるおいあるまちとはならないとの認識が確認された。事務局を中心に内部論議を重ねた結果、基幹公園としての中央公園にすべきとの結論を出し、市民の考えが取り入れられた、親しみのもてる公園にすべく、運動を始めた。

帯広市も、公園にむけて内部的合意を取りつけ、作業を進めていて、公園の名前の募集を市民に公募(7月～8月)し、74人の市民から51の名前の応募があり、一番多かった中央公園に名前を決定したところであった。

帯広の森市民協議会は、「われわれにとって広場とは」という問いかけを行い、第1回のシンポジウムを昭和49年11月23日、第2回を昭和50年1月21日、第3回を2月20日と3回にわたって開催し、しめくくりには、帯広市による「帯広の森と中央公園を語る市民の集い」を開いた。この間、1・2回のシンポジウムを経て、1月25・26日と、氷祭り会場において、チーム・グローバル・アーバンと、けんさん会（市若手職員による自主的勉強会）との手作りの合作による、中央公園の模型をもちこみ、氷祭りの会場で展示をしながら、市民の中央公園と帯広の森に対するアンケート調査を行った。その成果を受けて、帯広市へ私達のつくる中央公園の要望書を提出した。

中央公園シンポジウムの主旨は、

『街の中には大きなビルディングが日に日に多くなってきている。市民はその中を忙しくせわしく行き交う。その様な都市化状況の中であって、街中心部における広場＝公園とはどんな意義を持つべきだろう。

今、広い土地がある。しかし木もなければ、芝生もない。そこにあなたの主体的、創造的な生活空間をどうぞ、と言われたら……

あなたは何をそこに要求しますか。

現在の激しく揺れ動く社会情勢の中で、ともすれば私達は無味乾燥な日常生活を繰り返しやすい。地球社会は人間不在状況をすでに呈している。

私達は、そのような社会の方向性を変える意味においても、現在の帯小跡地の利用方法について考えてみたいと思います。

全市民の要望、意志のあわれめとしてこの跡地が“市民の広場”として利用されていくなれば、どんなにすばらしいことでしょう。』

中央公園は、市の担当者と帯広の森市民協議会を中心とする市民の間で、具体的な論議を重ね完成した。

市民にとって広場とは何だろうか
広場から受ける印象は /
立派な、整った、緑豊かな、まどろっこしい
はるか昔の時代から人間がここに
集って暮らすようになったこと
建物(商店)がより建ちだしたこと
ヨーロッパではもうない、古い「居間」
あつたあつたイメージの中で
今あるのは、新しい市民の広場を
この帯広の街の中に創り出すことである。

昭和49年2月20日

中央公園シンポジウム

われわれにとって広場とは

主 催

帯広の森市民協議会

11月23日(土) PM 6:00~
市民会館 2階集会室

街の中には大きなビルディングが
日に日に多くなってきている。
市民はその中を忙しくせわしく
行き交う。
その様な都市化状況の中であって、
街中心部における広場＝公園
とはどんな意義を持つべきだろう。
今、広い土地がある。しかし木も
なければ、芝生もない。そこに
あなたの主体的、創造的な生活空間を
どうぞ、と言われたら……
あなたは何をそこに要求しますか。

現在の激しく揺れ動く社会情勢
の中で、ともすれば私達は無味
乾燥な日常生活を繰り返しやすい。
地球社会は人間不在状況をすでに
呈している。
私達は、そのような社会の方向性
を変える意味においても、現在の
帯小跡地の利用方法について考え
てみたいと思います。
全市民の要望、意志のあわれめと
してこの跡地が“市民の広場”と
なれば、どんなにすばらしいこと
でしょう。

十勝鉄道シンポジウム

帯広の森市民協議会は昭和49年5月の設立以来、模擬議会、中央公園シンポジウム、そして第1回の市民植樹祭（昭和50年）を市と共催する等、帯広のまちづくりに新風を巻き起こした。昭和51年になって十勝鉄道（大正9年営業開始）が、モーターゼーションの発達の中で、その歴史的使命を終えようとしていた（昭和52年営業終了）。市民の間で長い間トテッポという愛称で親しまれていた十勝鉄道の新しい使命を模索すべく、昭和51年1月27日、2月24日、4月13日と、3回のシンポジウムを主催した。9月18日には、トテッポが創立時より生徒の足となっていた帯広農業高校の演劇部の協力により、講演と演劇の夕べを行うなどの運動を展開した。市民に十勝鉄道が単に一会社の営業戦略によって消滅させられるのではなく、帯広のまちの歴史の証人であり、文化遺産であるとの認識を広めた。トテッポは単なるノスタルジーとして形を変えて存続するのではないことを訴え、まちづくりと市民の関わりを問かけた。

トテッポは、昭和57年に自動車・歩行者専用道として計画決定し、帯広のまちの中心部と帯広の森をつなげる遊歩道として完成（平成4年）し、市民に親しまれている。

尚、平成6年、トテッポ通りと帯広の森の間は、売買川部分が整備未了となっている。が、売買川放水路等の整備が完成した時点で、大平原自転車道として計画されている。

昭和50年2月3日

要 望 書

— 中 央 公 園 に 関 し て —

帯 広 市 長 殿

帯 広 の 森 市 民 協 議 会
代表常任委員 林 克 己

帯広の森市民協議会は、1974年5月発足以来帯広の森を柱として帯広の街づくり全般にわたり参加してまいりました。

その中でも中央公園（帯小跡地利用計画）につきましては、市民関係者とのシンポジウム（11月末及び1月末）等を含め幾度かの話し合いを重ねてきた経過がございます。その中で第2回目のシンポジウムにおいて論議が集中した下記の2点について市民協議会として強く要望するものであります。

記

1. 中央公園造成計画においての市民参加原則を確立していただきたい。
それとともに市の積極的な姿勢を強く望みます。
2. 現段階においての市の計画は、全体の2/3を想定しておりますが中央公園のもつ意義等を考えて全敷地を計画に組み入れていただきたい。

以上2点について要望いたします。

(2) 帯広の森ティーチ・イン

昭和54年5月13日、第5回市民植樹祭が行われた。市民植樹祭は、段々と市民の間に定着し始め、春の大イベントとして、帯広・十勝の春をつげる風物詩となり、その頁を重ねてきた。参加する市民も、最初の500人から3,000人へとその数を増していった。

森づくり運動が軌道に乗り始めた時、植樹祭実行委員会は、今までの5年間を振り返り、これからの森づくりについて、市民へのアピールと、新しい意見を吸収して、情性に落ちることのない様にと、NHK（全道生中継）の協力を得て、植樹祭会場でティーチ・インを開くことにした。

尚、この植樹祭より、森づくり100年がかりを全面に押し出して、5/100という表現を使うことにした。100という数字は聞きやすい言葉であるが、実際は一人ひとりの人生では全うできる年月ではない。孫子の時代までいかなければ、到達できない年月である。ここに明治16年晩成社が開拓の第一歩を印して以来、営々として築かれてきた帯広・十勝の地域づくり100年の時間の重さを実感できるのである。これは取りも直さず、これからの100年を考え、これからの帯広・十勝の歴史を新たにつくっていくことでなければならない。

第1回帯広の森ティーチ・イン（要旨）

時 昭和54年5月13日(日)
所 帯広の森市民植樹祭会場
人 質問者 後藤順一（NHK）
〃 解説者 小野寺俊一（元帯広市図書館長）
〃 司会者 高橋大介（実行委員会事務局）
〃 提言者 山品昌弘、種田慈雨子、牧野道幸
〃 発言者 植樹祭参加者
〃 帯広市 田本市長、助役、公園緑地課長

植樹会場で参加者に質問

〔質問〕 植樹はうまくいきましたか。何の樹ですか。
〔参加者〕 ハルニレの樹をなんとか植えました。
〔質問〕 植樹祭に参加するのは何回目ですか。
〔参加者〕 今年で結婚して10年目になったのを記念して、始めて参加した。
〔質問〕 帯広の森には関心をもっていますか。
〔参加者〕 子供が学校で帯広の勉強をしていて、どんな所か見たいというもので家族と一緒に来ました。広い所で気持ちがいい。何年後かに又来てみて、樹が大きくなるのを見たい。
〔参加者〕 大きな森ができたらいいと思って、始めて参加した。会社の実行委員の人がいて、森の話は聞いていた。子供が今年森の少年隊に入ったので感化された。
〔質問〕 今帯広は、緑に恵まれているか。

〔参加者〕 帯広は建物ばかりできて緑は少ないと思う。私達の小さい時はもっと緑があった。

ティーチ・イン

〔質問〕 帯広の森とは何か。

〔解説〕 歴史づくりである。緑を大切にしない民族はほろんだ歴史をもっている。日常的には家族を大事にすることである。親という文字は「立木を見る」と書き、親孝行の孝という文字は「土に苗木を植えて子という字」を書く。中国でも日本でも木を植えるということは生きることの基本である。これが帯広の森づくりに参加することによって帯広の歴史をつくっていくという心の支えになっている。

〔司会〕 帯広の森の持つ意味を皆さんと一緒に考え、今後、帯広の森がどうあるべきかの論議をしたい。

〔提言〕 森についての意見を述べたい。

1. 森は私にとってシンボルでもある。だから形づくられたものでなくとも良い。自分の心の中で自由につくられるものである。経済的効果があり、都市の装置としてのものであるならばいい。

2. まちづくりに参加するための手段としての森づくりである。森づくりはタイムスパンの長いものであるので大きなエネルギーを持っている。運動の持続性と起爆性をもっている。特に運動は拡がり持続性を持ち、市民皆の森となる。森づくりは大いなる素材である。

3. 共通の言語をもつ生活空間をつくっていききたい。

〔提言〕 2人の子供を自然と接する機会のないまま育てたことに悔いがある。その反省に、子供達に財産としての自然を残したい。帯広100年のまちづくりは自然の破壊ではなかったか。道路、下水も大事だけれど自然を残すことももっと大事だと思う。

帯広の森は楽しめる公園にしたい。社会教育施設（美術館、博物館）や、植物園、体育施設、野外生活を楽しめ、子供達は木登りをしてもおこられないガキ大将の森など、スケールの大きい森であってほしいと思う。

〔市民〕 参加者が増えたのはとてもうれしい。が、用地が402から336haにへったのは何故か。

〔助役〕 森の計画402haは変わってない。336haは、用地を買収しなければならない面積である。

〔解説〕 初めてのティーチ・インだが、行政にまかせっぱなしでなく、市民も参加して、夢を語ることも大事です。森が果たす役割は帯広の財産の備蓄でもある。

〔市民〕 帯広の森は子供の遊び場であり、市民のいこいの場であってほしい。帯広市は森の機能をもっと早く充実してほしいと要望します。

〔市民〕 まちの中はディスコとかスナックとか、楽しめる場所と思う。帯広の森はウィーンの森のように安らぎのもてる場所でありたい。

〔市民〕 帯広の森づくりは大いに賛成である。これは都市の装置として森をつくる。帯広の森は市民個々の価値観で利用するものである。それは、自然を征服するのではなく、自然の中に生きるということである。

〔質問〕 帯広の森づくりの計画でいう心の森とは何か。

〔提言〕 帯広の森の計画づくりでは、帯広の森ではなく、十勝の森と考えた。これは、全国でも類のない規模をもった公園である。故に北国の風土をもった原始的な公園であって、失われた人間性を回復できる場所である。

〔留学生〕 植樹祭に参加して感激した。現代文明の発展は今だけを考えている。私は子供達のことを考えて森づくりをしていることに感激した。日本に留学して、日本、帯広の人に借りをつくって肩が重かったけれど、樹を10本植えた分軽くなった。農業経済を勉強しているので一言、果木樹を植えたら良いと思います。

〔提言〕 これだけ大規模に毎年多くの市民参加の植樹の森づくりによせる情熱と愛を皆と喜びたい。今まで植樹したところを見てまわった。都市公園という形で森づくりをすると、行政ペースで進み全国と同じ公園づくりになる。十勝の風土に適した、十勝らしい独自のものを市民が参加してつくるべき。今年はハルニレが多かったが、今年度の土には適さないので残念。生きた森づくりをすべきと思う。地権者として森づくりに協力した人は、森に愛の目を向けていることを忘れてはならない。

〔助役〕 帯広の森は都市的か自然かという対立の構図ではなく、両者がセットになった森づくりをしていきたい。

〔市民〕 帯広の近郊で農業を営んでいるが、最近時季になると、山菜採りに来る人が多くなって、山が荒らされて段々山菜も減ってきている。そういう状

況もあるけれど、帯広の森にも、山菜や鳥や虫が住めるように早くなってほしい。まちから家へ帰る時、林があって畑が広がる心が晴れぱれとして、ひとつのけじめを感じる。帯広の森が早くできるよう、これからも植樹祭に参加していく。

〔市民〕 先住民族の遺跡の発掘調査をやっていると、遺跡の中から、クルミとかドングリの実をたくさんみつける。これらの実は、十勝の風土に昔から根ざした樹なので、帯広の森にはそれらの樹々をたくさん植えてほしい。

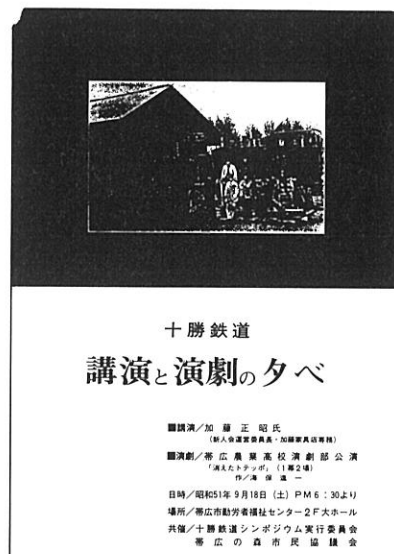
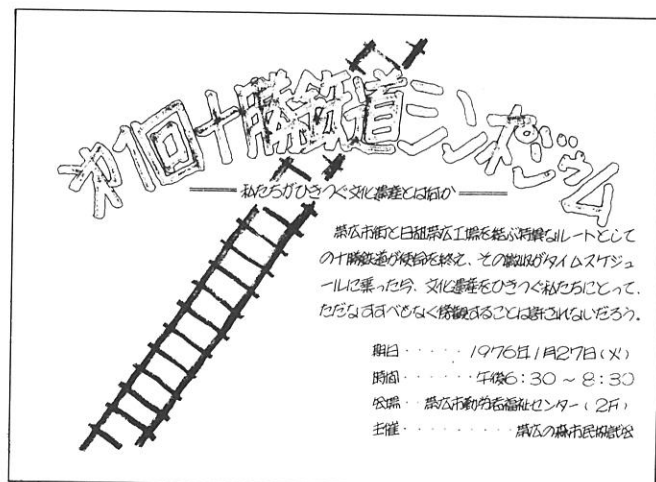
〔市長〕 まず今日ティーチ・インに参加された市民の意見をたっぷり聞いて、これからの行政施策にかاشていくことを約束したい。昭和48年に計画決定された帯広の森は、私は都市の皮膚論の重要な構成素材であると思っている。今、まちが都市砂漠となり、人類滅亡の危機とされているが、帯広の森＝森林はオアシスである。帯広の森は緑の空間として形にこだわらない森づくりをしていきたいし、これを市民に問かけることによって、市民参加というまちづくりへの直接参加ということが、樹を一本一本植えることによって成されていく。

〔解説〕 まちづくりが市民参加によって力強いものになっていくと、首長が変わっても、計画が立ち消えになることにはならない。

今後もティーチ・インを続け、市民の考えを確かなものにするためにも、市民と市民、市民と行政など、話し合いの場をいつでも設けて、続けていくことが大事だ。

参加した市民の感想

- ・ティーチ・インはこの後も継続すべき。
- ・子供の意見を聞くべきである。
- ・若い樹、青年の樹等を混せて植樹する。
- ・知らない人がたくさん集まって楽しい。



(3) 市民環境シンポジウム

第1回市民環境シンポジウム

1. 日 時 平成2年12月14日 18:30～
2. 場 所 道新ビル2階ホール 中会議室
3. テーマ 「これで良いのか帯広の森」
 - (1) 管理と間伐について
 - (2) 育樹の仕方について
4. 参加者
主催者 公害対策市民会議、緑の十勝会議
(司会) 市原秀朗帯広地区労副議長
帯広市 都市建設部長、公園緑地課長
課長補佐、係長、主任
5. 会議次第
 - 1) 開会のことば 公害対策市民会議事務局長
 - 2) 説明「帯広の森について」
帯広市公園緑地課課長補佐
 - 3) 提言
山田 哲氏 (帯広の森市民植樹祭
実行委員会事務局長)
久保紀子氏
(主婦、帯広市施設見学説明員)
野洲健治氏
(野草研究家、十勝自然保護協会)
 - 4) 討議
 - 5) 閉会のことば
山根 裕 公害対策市民会議事務局長

議事録 (発言要旨)

〔司会者〕 今回のシンポジウムは、必ずしも市側に対して質問責めということではなく、いろんなことを引出して、行政の側に対してお聞きしたい。現状の認識と、これからどうしていくのか、この辺についての提言ということをしたい。

〔山田〕 市民植樹祭では、「みんなで創ろう帯広の森」を合言葉として、官民一体となって取り組んできた。最初は試行錯誤であったが、5回目くらいから現在のやり方が確立してきた。

今日のテーマである間伐の問題については、特に植樹地の中で(昭和)51年から53年、この3年間のところが特にひどい。1メートル間隔で植えたところ。現在、この狭さが横枝の伸び、もしくは、根の張りなどが疎外されている。そんなことで病害虫の問題も含め、共倒れの危険性が非常に出てきた。これは、大きな悩みの種であり、また今日こうして市民の皆さんと問題を論議していただきながら、なんとか将来的にこのところを健全な森にしていきたい。

問題は、記念植樹ということで、結婚、子供の誕

生等で植樹祭にたくさん参加されている。皆さんのご意見を伺いながらどう市民の合意を得ていくか。

市民が一年のうち植樹のときだけでなく、いろんな形で植樹地の中に入り込んで、現状の中をそれなりに理解いただきながら、間伐の方法を考えている。未だ100分の16で、後84回残っているという認識で論議していただきたい。

〔久保〕 完成予想図を見ながら将来はこんなふうになります、というのが、今の形からはぜんぜん想像もつかない。私達が死んでしまってからこんなになるのか、それなら今することがあるのではないか。

運動施設ばかりあるので、ご婦人方はここへ来ても何もすることがない。私はもう100分の16たったのだから、綺麗な芝生にベンチがあり、最低トイレがあればいいと思う。

〔野洲〕 木を植える、木を育てるということは、木の身になってあるいは草の身になってものを考えてやるということ。そこに一体何があったか、どんな木がその土地を好きなのかを考える。木の下には必ずそれに相応しい草が出てくる。すると昆虫がいるからそこに鳥が来る。

〔市民〕 51年に帯広を離れ10年後に戻り帯広の森が気になっていた。樹がこんなに混んでいていいのかと思う。植えた後は半ば公的なものと考えてみんなで育てていく。

もう一つ、植えている所の看板は、ある程度になったら外したらどうでしょうか。

〔市民〕 間伐は大きくならないうちに手を掛けないといけない。間伐は刃物を使い危険性が伴う。間伐は簡単なものではない。

〔市民〕 育樹祭に家族と参加した。慎重にやれば子供にもできる。帯広の森づくりは、市民づくりであり、人づくりであろうと考えている。最小単位の家族という人間社会の中で親子の会話と、危ないと言われても仕事をやってみると非常におもしろい。市民合意の方法の一つに、間伐した木を何か利用できないかと考えている。

〔市民〕 人間の手を加えたものは、人間が最後まで処理してやらなければならない。自然淘汰という言葉は、自然の中にあって、原生林の中にあって始めて使える言葉だ。

池があるが、草が全く生えていない。カモの逃げ場がない。何の目的で作ったのか分からない。

間伐の木については、ベンチ、風囲いなど市民が知恵を出せばいろんな利用方法がある。

〔市民〕 育樹祭といってもイメージが沸かない。この森をどんな森にするのかというイメージを持っていなければならない。ただ枝打ちをして、全て下草刈りをするということでは、育樹祭という目的にならないと思う。

〔市民〕 去年遊歩道づくりをやった。遊歩道づくりは市民が集まってやるということにならないことが分かった。育樹祭のイメージは、分からなければ我々が作る育樹祭というものはどういうものかということを考えていきたい。

〔市民〕 育樹祭をやるのであれば、インストラクターを養成されて、市民の先頭に立って指導していくという方法がいい。5、6年前に市の高齢者学級でシルバー育林隊についての研究をして、シルバー育林隊を作ろうと提案した。

公園緑地課に何回か足を運んだけれど、専門の担当者が配置されていない。

〔市民〕 植樹祭と育樹祭という二つの祭りがある。

植樹祭は何もない所に皆で森を作る。育樹祭になると林らしくなってきて、子供達が道具を使って経験することは、森を理解するのに良い。虫や草花も揃うようになってきて、森づくりの経験を通して子供達が森を理解する。危ない面もあるが、指導の者がついてやればいい。

間伐材を利用してベンチなりログハウス等、憩いの場に提供していく方法がある。将来の森の姿がよく分からないが、人工林のままでいくのか、複層林にしていくのか、生えてきた木を守っていくのか、位置付けも必要だと思う。

〔市民〕 皆の意見を聞いていると専門家が多いようだが、市民に間伐を理解してもらうには、木の身になってわかりやすく説明することを、最初の段階としてやっていかなくてはならない。

〔野洲〕 野外学校で間伐を今年やったが、他のことは何も印象に残らないが、これだけ辛い仕事をやったのだから非常に印象的だ。これによって木が大きく育つということがよくわかり、感想文にはそればかり書いてあった。だから帯広の森も学習の場として素晴らしいところだ。生き物の生息を教育する場としても素晴らしい所だ。風の来る側に防風林が無いと、せっかく植えた木が枯れていく。木の身になると、木も陽性の木と陰性の木がある。このような学習の場が必要ではないか。

天然林というのは、種々雑多になっているが、一つの法則に従って生えている。白樺がパイオニアの役目だったら、これが自然に枯れて、その次くるのは全部決まっている。帯広の森は人間がやったのだから、人間が手を加えなければ枯れる。何かの機会に市民に分かってもらう努力をしなければならぬということが一番大事ではないか。

同じ木を植えたら、同じ虫がいて、同じ鳥が来て病気にかかったら一発で全滅する。これを子供に話すと、非常に理解が早い。

〔久保〕 随分熱心に森に関わっている方がたくさんいるんだと感じた。一般市民はそれを知らないと思

う。帯広の森について、今まで抽象的に話していたような気がする。普通の市民の私を感じたわけだから、他の方々も感じていただけたと思う。

〔山田〕 帯広の森で植樹をしているが、どのようなイメージの森になるのかということをもっと具体的にPRしたり、またビジュアルな形にして、市民の方に理解していただく方法を考えなくてはならない。森が出来つつある中で、市民がより森の中へ入り込めるような提案も、合わせて考えていかなければならないと思う。

〔部長〕 想像を越える強い関心で、私達が考えていないような素晴らしいアイデアをご提言いただき、感謝を申し上げます。

先ず、基本になるのは木が無い森というのはあり得ない。とにかく木をたくさん植えていこうというのが、今になって反省点になっている。今日になってかなり危険な状態になってきている。

今年新しい市長になりまして、緑を大切にすることから、明年度は公園の管理費を倍増という大変な意気込みである。

育樹祭については、今年準備会ということで、それぞれ専門知識をもっておられる方、実行委員会の皆さんで行った。成長した木を刃物で刈り払い草刈りなどしても絶えず危険が伴うので、未だに踏み切れない部分もある。具体的に一年でも早く定着させたい。間伐の問題は間違いなく賛否両論ある。切るには忍びない気持ちがあって手を出せないでいた。木の移植には具体的な検討をしてみたい。公園緑地課に専門職員がいないのは、問題があったのではないか。

明年度の植樹祭から、あなたの木は間伐、場合によっては移植もありえる、と印刷物にして市民の方々に配布していきたい。

帯広市は、現在帯広の森全体に向けて当初作った基本計画が一つあるのみ。育樹祭の様に森に来て欲しいといっても、草藪の中を歩けというようなこともある。今後、機会を作っていただいて、提案や意見を賜れば幸いと考える。

〔山根〕 第1回目の環境シンポジウムのスタートとしてはまあまあであったと思う。70人前後の出席者で、20項目以上の提言があった。環境シンポジウムは継続されるが、今日のテーマではもうやりません。皆さんの方に移します。

先に問題提起して市民に火付けの役をすることを我々はやっていきたい。市も参考になったと思う。

ありがとうございました。

(4) 施設区のイベント

1) 施設整備

帯広の森運動施設区の整備は、「帯広の森造成計画」に基づき、都市の無秩序なスプロールを防ぎ、公害緩和、都市災害の防止、気象環境の緩和等、よりよい都市環境を作り、余暇活動の場を提供しようとすることから、人間性回復の場として、高齢者には散策の場に、子供達には自然の摂理の中で生物の知識と情操を深める教育の場として、また、静かな木陰での読書、思索の場として、スポーツや家族そろってのピクニック等、はかり知れない効果を持つものであり、大きな意義もっています。

昭和49年に都市計画に決定されてから、昭和52年の運動施設分追加編入により、運動施設を核とする施設配備が具体化し、特に都市公園機能のスポーツ機能は、「市民が広くスポーツを楽しむ場」「競技の場」を併せ持つものとして、スポーツ人口の拡大やレベルアップをはかるとともに、全国、全道大会、国際大会等の誘致により、スポーツ活動の振興をはかるものです。

特に帯広・十勝は冬季スケートが盛んであり、屋外パイピングリンクの導入や屋内アイスアリーナの設置により、シーズンの拡大やスケート機会の増大をはかれるものとして、具体的な検討が進められました。

運動施設の配置については、冬季スポーツ利用施設の集約化をはかり、アイスアリーナを中央管理センターとして位置付けるなかで、夏季施設が順次配置されました。(図参照)

- ① 帯広の森陸上競技場オープン
(昭和58年4月)
- ② 帯広の森体育館オープン
(昭和60年10月)
- ③ 帯広の森スピードスケート場オープン
(昭和60年11月24日)
- ④ 帯広の森アイスアリーナオープン
(昭和62年8月)
- ⑤ 帯広の森第2アイスアリーナオープン
(昭和63年1月)
- ⑥ 帯広の森研修センターオープン
(平成元年1月)
- ⑦ 帯広の森野球場オープン
(平成2年6月24日)
- ⑧ 帯広の森運動公園パークゴルフ場オープン
(平成6年8月)
- ⑨ 帯広の森陸上競技場全天候型改修オープン
(平成6年9月3日)
- ⑩ 帯広の森市民プールオープン
(平成8年予定)

2) イベントと歴史

＜国民体育大会・冬季大会＞

このような配置計画が進む中、昭和64年に北海道で完全国民体育大会を開催する声があがり、帯広市が冬季大会スケート・アイスホッケー競技会の会場地として名乗りを上げました。

幸いにも、帯広市は帯広の森運動施設整備を進めて



いる折でもあり、国体開催施設整備と合わせ、整備計画に拍車がかかりました。

昭和55年に、64国体の冬季大会スケート、アイスホッケー競技会場として、道の内定を受け、急速に冬季スポーツ施設整備が具体化を見ました。

〈屋内スピードスケート場〉

屋外スピードスケート場は、400m標準ダブルトラックリンクの鋼管埋設型として、昭和58年の着工から3ヶ年をかけて昭和60年11月28日、「帯広の森スピードスケート場」としてオープンしました。

このオープンを契機に、昭和61年2月に全日本ジュニアスピードスケート選手権大会、昭和62年1月には全日本スピードスケート選手権大会、昭和63年1月に全国高等学校スケート競技選手権大会、昭和64年＝平成元年に第44回国民体育大会冬季大会スケート・アイスホッケー競技会、平成2年には、全国中学校スケート競技大会と、1990世界ジュニアスピードスケート選手権大会、平成3年12月に日本学生氷上競技選手権大会が開催され、毎年、全国世界大会の開催地として、世界中に帯広の名を知らしめています。

〈アイスアリーナ〉

一方、アイスアリーナの整備は、昭和59年に工事着工以来3ヶ年を過て昭和62年8月、「帯広の森アイスアリーナ」としてオープンしました。(60m×30m鋼管埋設永久床式リンク)また、併設して、(財)帯広市文化スポーツ振興財団が「帯広の森第2アイスアリーナ」を昭和63年1月にオープンし、全国的にもめずらしい、併設アリーナが完成したのです。

これらのオープンを機に、昭和63年の全国高等学校スケート競技選手権大会、平成元年第44回国民体育大会冬季大会スケート・アイスホッケー競技会、平成2年全国中学校スケート競技大会、平成3年日本学生氷上競技選手権大会、平成4年第1回アイスホッケーアジアカップ1992、平成6年3月'94世界女子アイスホッケー選手権大会アジア代表選考大会が開催され、スケートのメッカ帯広の名を国内はもちろんの他、世界中に広めています。

〈研修センター〉

これらの施設整備に伴い、全国各地からの合宿誘地に力を入れ、昭和63年12月「帯広の森研修センター」をオープンし、国内ばかりではなく世界中から選手を受け入れ、スポーツ施設を併用利用できる体制を作ってきました。

〈いろいろなイベント〉

冬季スポーツ施設については、全国、世界大会他、毎年、全道大会を開催していますし、アイスアリーナでは、アイスホッケーの日本リーグや北海道選手権などの実業団の試合が毎年開催されています。

また、冬季施設を利用し、国際交流にも力を入れ、平成2年には、25年ぶりに大韓民国とスケート交歓大

会を復活させ、以後毎年交互に帯広とソウルで交歓大会を実施しています。平成5年からはアイスホッケーも大韓民国と交流大会を行い、隔年で帯広の森を会場に大会が実施されています。

平成6年には、スピードスケートワールドカップの会場として、国際スケート連盟から要請があり、全市あげての大会の成功に取り組み成果を上げました。

〈その他の施設〉

冬季スポーツ施設の整備ばかりではなく、市民のスポーツに親しむ場として、昭和58年に「帯広の森陸上競技場」をオープンし、毎年10月10日の体育の日には市内小学校下から帯広の森までの「市民歩こう大会」を開催し、多くの市民に帯広の森をスポーツ・レクリエーションの場として利用してもらっています。

昭和60年10月には、「帯広の森体育館」をオープンさせ、総合体育館の使用過密解消を図りました。

平成2年には、「帯広の森野球場」をオープンし、プロ野球名球会選手を招いての野球教室を開催し、多くの子供達に野球のおもしろさ、楽しさを知ってもらうとともに、技術の向上に一役買っています。

また、毎年プロ野球を開催し、真近にプロの技術を感じてもらっています。

平成6年8月には、ニュースポーツとして盛んなパークゴルフ場をオープンし、連日多くのゴルファーに利用されています。

また、同じく8月に、帯広の森陸上競技場を全天候型トラックに改修し、第2種公認施設としてオープンしました。オープンを記念し、9月25日には、'94ジャパンフットボールリーグ公式戦帯広大会「PJMフューチャーズ対東芝」戦が開催され、多くの市民にサッカーのダイゴミを満喫していただきました。

今、帯広の森運動施設では、平成8年オープンを目指し、仮称「帯広の森市民プール」の建設工事が始まっています。競技用50m公認プールと幼児・児童用プールを併設し、大人から子供までが楽しめるものとして計画しています。また、後年次にはレジャー用の流水プールやジャグジープール、エンドレスプール、歩行浴プール等を備える計画となっています。多くの市民から待望する声が聞かれます。

この他、弓道場、アーチェリー場、球技場、テニスコート等、多くの施設整備が残されており、市民要望に対応できるよう官民一体となって整備努力がされています。

3) イベントの参加状況

帯広の森で開催された主なスポーツイベントの参加状況を見てみると、

① 第37回全国高等学校スケート競技選手権大会

(63. 1. 20～24)

選手・監督 1,514名
大会・競技役員他 1,033名
報道関係者 249名 (34社)
観客.....90,000名

② 第44回はまなす国体 (元年. 1. 28～31)

選手・監督 1,809名
大会・競技役員他 3,613名
報道関係者 350名 (50社)
観客 301,785名

競技会入場者数一覧表

	日	28日	29日	30日	31日	計
スピードスケート	午前	16,785	25,000	31,000	35,000	107,785
	午後	13,500	35,000	20,000	15,000	83,500
	小計	30,285	60,000	51,000	50,000	191,285
Aリンク	午前		8,500	8,000	5,000	21,500
	午後	8,000	21,000	9,000	5,000	43,000
	夜間	1,500	8,000	1,200		10,700
	小計	9,500	37,500	18,200	10,000	75,200
Bリンク	午前		1,500	2,400	300	4,200
	午後	1,200	2,600	3,000	400	7,200
	夜間	800	700	250		1,750
	小計	2,000	4,800	5,650	700	13,150
Cリンク	午前		1,100	600	200	1,900
	午後	500	600	450	200	1,750
	夜間	200	200			400
	小計	700	1,900	1,050	400	4,050
セヤングター	午前		3,500	1,500	2,000	7,000
	午後	1,800	2,700	1,600	500	6,600
	夜間	900	450	3,150		4,500
	小計	2,700	6,650	6,250	2,500	18,100
合 計		45,185	110,850	82,150	63,600	301,785

③ 第10回全国中学校スケート競技大会

(2. 2. 2～5)

選手・監督 1,119名
大会・競技役員他 416名
報道関係者 100名 (22社)
観客 209,000名

④ 90世界ジュニアスピードスケート選手権大会

(2. 3. 2～4)

選手・監督 17ヶ国108名
大会・競技役員他 400名
報道関係者 139名 (32社)
観客.....35,000名

⑤ 第64回日本学生氷上競技選手権大会

(3. 12. 21～24)

選手・監督 1,461名
大会・競技役員他 389名
報道関係者.....58名 (20社)
観客.....88,000名

⑥ アイスホッケーアジアカップ1992

(4. 1. 15～19)

選手・監督 4ヶ国109名
大会・競技役員他 253名
報道関係者 160名 (23社)
観客.....13,000名

⑦ 94世界女子アイスホッケー選手権大会アジア代表選考大会

(6. 3. 10～13)

選手・監督.....2ヶ国 73名
大会・競技役員他 220名
報道関係者.....60名 (12社)
観客 3,000名

⑧ 94/95スピードスケートワールドカップ帯広大会

(6. 12. 3～8)

選手・監督.....14ヶ国 73名
大会・競技役員他 193名
報道関係者 289名 (38社)
観客.....29,000名

以上のような参加状況となっており、特にはまなす国体の参加状況は他に比べ、多くの市民が参加したことにより、帯広の森が市民の財産として強く印象付けられたことはいうまでもありません。

これからも、帯広の森は市民の宝として、世界・全国の大会ばかりではなく、道内・管内の大会会場として多くの人たちの心の中に根付くものと思います。

4) イベントと施設の整備

第37回全国高等学校スケート競技選手権大会と第44回はまなす国体の開催は、帯広の森スポーツ施設の整

備に拍車をかけるものでした。

主要幹線となる10号道路の整備は、道の事業と連動し、西帯ニュータウンの進捗に大きく貢献したばかりではなく、西帯広地区の発展に多大な功績を残してくれました。

運動公園内の基幹路線である南7線は、公園道路として、また、各施設への誘導路線として、さらに芽室町との連絡路線として早くから整備要望がありました。が、両大会の基幹路線と位置付けられて以来、精力的な整備が進められ、大会開催前に全路線が完全整備となり、各施設の駐車場整備とともに、市民の財産として後世に残るものとなりました。

野球場・陸上競技場・体育館・アイスアリーナ・スピードスケート場の駐車場の他、未整備区域を臨時の駐車場として活用し、25,000台の駐車場を確保できる体制が整い、今では、どのような大きな大会の開催にも対応できる状況にあります。

平成5年9月に開催された日本プロ野球イースタンリーグ公式戦「読売ジャイアンツ対横浜ベイスターズ」では松井秀樹選手の来帯に伴い、多くのプロ野球ファンが詰め掛け、23,000人が帯広の森野球場を満パイにしてくれました。

現在では、帯広の森体育館をはじめ、アイスアリーナ、陸上競技場・スピードスケート場で、連日各種の大会が開催されており、多くの利用者から、スポーツ施設の集中化に称賛のご意見を寄せられています。

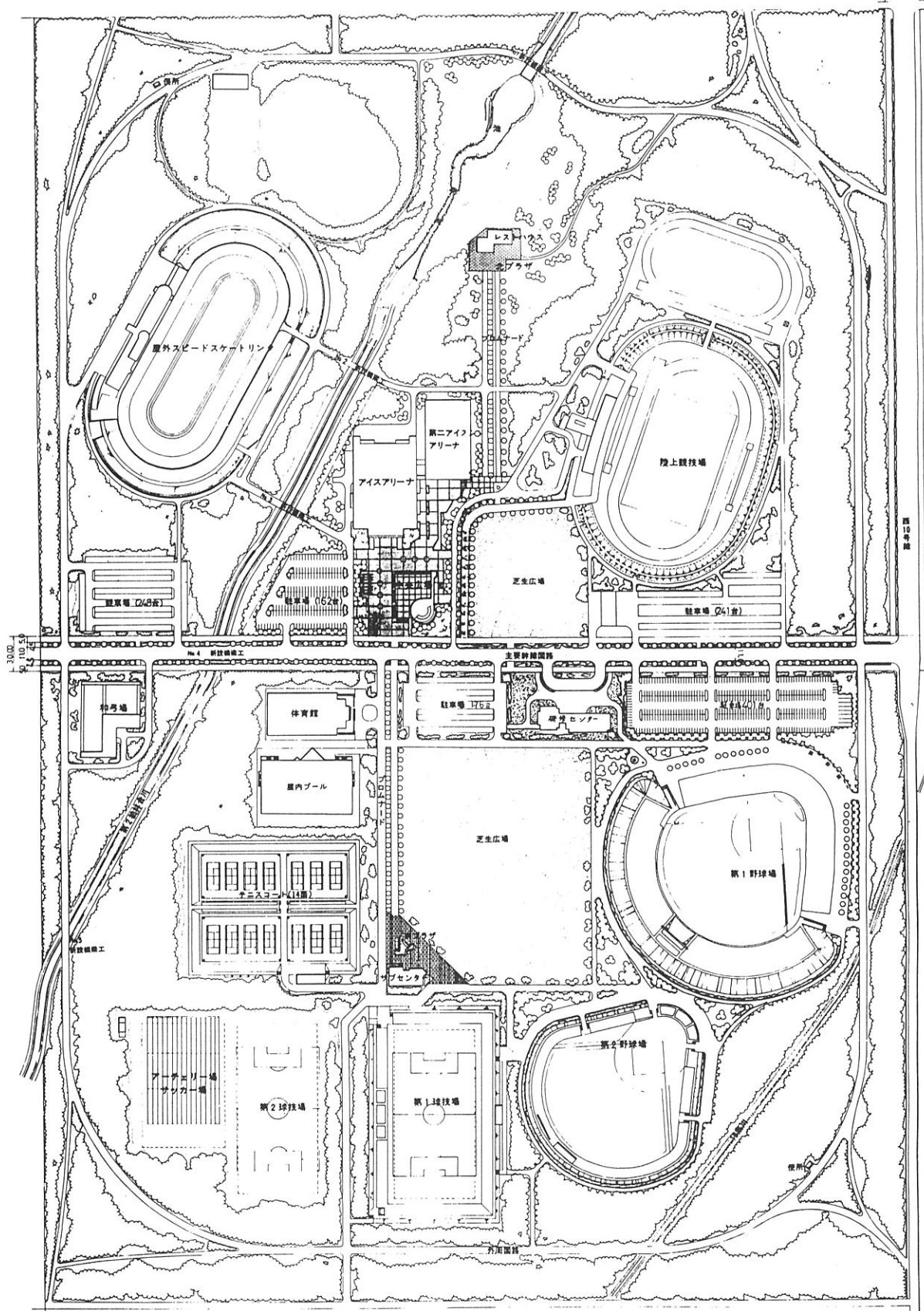
帯広の森運動施設は、これからも整備が進みます。市民プール・弓道場・アーチェリー場・球技場・テニスコート・第二野球場等多くの施設が整備予定されており、多数の方から早期施設整備を望む声が寄せられています。

帯広市では、市民ニーズに応えるべく、年次計画を持って施設整備に取り組んでいますので、市民の皆さんの暖かいご支援をお願いいたします。

帯広のスポーツと森でのイベントの歩み

昭和21年 4月20日	「帯広市体育連盟」発足
昭和39年10月10日	東京オリンピック開催
昭和47年	帯広市地域スポーツ振興事業始まる
昭和58年 1月	帯広の森スケート施設基本設計策定（運動施設全体を含む。）
昭和58年 4月	帯広の森陸上競技場オープン
昭和59年 3月31日	帯広市体育施設条例及び施行規則施行
昭和59年 7月 1日	「帯広市文化スポーツ振興財団」設立
昭和60年 9月18日	帯広市体育施設管理規則施行
昭和60年10月	帯広の森体育館オープン
昭和60年11月24日	帯広の森スピードスケート場オープン
昭和61年 2月 7～9日	第9回全日本ジュニアスピードスケート選手権大会
昭和62年 1月11～13日	第55回全日本スピードスケート選手権大会
昭和62年 8月	帯広の森アイスアリーナオープン
昭和63年 1月	帯広の森第2アイスアリーナオープン（帯広市文化スポーツ振興財団所有）
昭和63年 1月20～24日	第37回全国高等学校スケート競技選手権大会
昭和63年10月10日	「健康スポーツ都市」宣言
昭和63年12月20日	帯広の森研修センター管理規則施行
平成元年 1月	帯広の森研修センターオープン
平成元年 1月28～31日	第44回国民体育大会冬季大会スケート・アイスホッケー競技会
平成元年	マイスポーツ・マイライフ奨励事業始まる
平成2年 1月 7～8日	1990日韓スケート交流会
平成2年 2月 2～5日	第10回全国中学校スケート競技大会
平成2年 3月 2～4日	1990世界ジュニアスピードスケーティング選手権大会
平成2年 6月24日	帯広の森野球場オープン記念「名球会野球教室」開催
平成3年12月21～24日	第64回日本学生氷上競技選手権大会
平成4年 1月	日韓スピードスケート親善交流会
平成4年 1月15～19日	第1回アイスホッケーアジアカップ1992
平成4年 5月26日	'92ブラザーカップ新体操国際招待演技大会
平成4年11月 1日	バスケットボール日本リーグ帯広大会
平成5年 2月26～28日	第10回日本カーリング選手権大会
平成5年 6月23～27日	平成5年度前期日本卓球リーグ（実業団）
平成5年11月25～29日	日韓アイスホッケー親善派遣交流大会
平成6年 1月 6～7日	日韓スピードスケート親善交流会
平成6年 3月10～13日	'94世界女子アイスホッケー選手権大会アジア代表選考大会
平成6年 8月	帯広の森運動公園パークゴルフ場オープン
平成6年 9月 3日	帯広の森陸上競技場全天候型オープン
平成6年 9月25日	'94ジャパンフットボールリーグ公式戦帯広大会
平成6年12月 3～4日	'94/95スピードスケートワールドカップ帯広大会、開幕戦（第1・2戦）
平成6年12月 7～8日	'94/95スピードスケートワールドカップ史上初の連続開催（第3・4戦）
平成7年 3月15～18日	日韓アイスホッケー親善交流大会
平成7年 3月20～23日	'95アジア・オセアニアJr.アイスホッケー選手権大会
平成7年 3月26～28日	第19回全日本少年アイスホッケー大会

帯広の森運動施設区 基本設計図



縮尺: 1/2,000



§ 8 . 森の褒賞

帯広の森は今日まで、多くの賞を受賞しています。それは、一つにはその雄大な構想と遠大な時間を要するロマンとしての魅力に他なりません。一方、森づくりを進める市民の活動に対しても褒章をいただけてきました。ここでは、おもな褒章の受賞のあらましについてとりあげます。

(1) 「緑の都市賞」建設大臣賞

帯広の森が初めて日本全国に名前を知らしめることとなった褒章が、昭和57年に受賞した第2回「緑の都市賞」でした。

「緑の都市賞」は、緑豊かな都市づくりをめざして、都市の緑化、都市景観の向上等に取り組みすぐれた業績又はすぐれた提案をもっている団体、個人を顕彰する目的で、(財団法人)都市緑化基金と読売新聞社との共催で創設されました。

この賞に対し、帯広市は帯広の森をテーマにした論文「緑は語る～緑とロマンのマチづくり」を応募し、公共部門として『建設大臣賞』を受賞しました。

(論文の抜粋を「第6章」に掲載しています。)

授賞式は、10月18日、東京の読売新聞社の本社で行われ、市長に代わり大塚収入役が出席し、表彰を受けました。この年応募のあった『公共部門』25点、『民間部門』19点、論文部門』29点、計73点のうち内閣総理大臣賞1団体、公共部門5団体、民間部門2団体、論文部門1団体、計9団体が表彰を受けました。

この時に、副賞として30万円を貰いましたが、この賞を記念する何かがほしいということから、森にモニュメントをたてることとし、合計300万円の予算で制作されました。デザインは『十勝の風土と未来を考える美術家会議(代表森健二氏)』にお願いしました。その結果、「帯広の空と雲、緑を映す」というコンセプトが作られました。モニュメントは、昭和58年10月11日から制作が始まり、森の第4ブロック、完成したばかりの陸上競技場西側に設置されました。大きさは、底辺が約1.5メートル、高さが約3メートルの三角錐のような形で、ステンレス鏡板仕上げとなっています。

11月26日に行われた除幕式には、読売新聞社からの来賓を迎え、製作者や帯広の森市民植樹祭実行委員会、帯広市の関係者などが参加する中で行われました。モニュメントは「蒼穹」と名付けられ、名前の通りに帯広の澄んだ青空を映しています。

(2) 緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰

続いての受賞は、昭和59年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰でした。

この表彰は、内閣総理大臣の指示のもとに、関係各省庁が連携して、国土全般の緑化を推進することとし、総理府に關係9省庁の局長クラスが構成員となる「緑化推進連絡会議」(昭和58年3月1日閣議決定)を設け、『緑化推進運動の実施方針』(昭和58年4月14日)を定めたことに始まります。

この実施方針の中で「内閣総理大臣表彰」があり、「本運動の実施について顕著な功績のあった個人、団体に対し内閣総理大臣などの表彰を行う」とされています。

帯広市が表彰されたのは、「帯広市が『帯広圏緑のマスタープラン』など、緑化の基本計画に基づき緑化推進を図っていること、特に、帯広の森造成にあたり基本計画及び具体的行動計画として市民運動を基調として推進されていることが総理府の『緑化推進運動の実施方針』に沿っており、運動の実施にあたって顕著な功績があった」というのが理由でした。なお、表彰に至る経過の中で、建設省都市局公園緑地課都市緑地対策室及び北海道住宅都市部街路公園課などの強い推挙があったものと考えられます。

こうして昭和59年5月29日、総理大臣官邸において田本憲吾市長が中曽根康弘内閣総理大臣から表彰を受けました。この年は、環境庁、文部省、農林水産省(林野庁)、通商産業省、建設省、自治省のそれぞれの所管事業の中から16団体と個人4人、計20件の表彰がありました。

なお、中曽根総理大臣は、帯広の森に強く興味を持たれ、同年9月27日来帯し現地を視察する中で、帯広の森の第2ブロックでイチイの記念植樹を行いました。植樹式には、北海道副知事が来賓として参加したほか、市長、帯広の森市民植樹祭実行委員会、森の少年隊などが参加し、イチイを中心に10本のエンジュを植え込みました。

(3) 朝日森林文化賞

昭和59年には、もう一つの受賞がありました。帯広の森市民植樹祭実行委員会の活動に対して与えられた「第2回朝日森林文化賞」です。

朝日森林文化賞は、自然の保護・保全や森づくり、緑の生活環境づくりなどに優れた成果をあげ、またこれらの普及、啓発活動を推進して業績の顕著な団体または個人を表彰する目的で、朝日新聞社と(財団法人)森林文化協会との共催によって創設されました。

帯広市は、帯広の森市民植樹祭実行委員会を「都市の生活環境の緑化に貢献が著しい団体」として『環境緑化部門』に推薦しました。昭和58年12月のことでし

た。この推薦に基づき、賞の選考が行われ、翌年の4月16日に朝日新聞と建設省から現地調査員が来帯しました。その結果、実行委員会が、帯広の森の造成を市民として推進するためのボランティアであり、造成当初からの市民参加の実績を高く評価されて受賞が決定しました。

この受賞により、帯広の森が「構想」として優れているだけでなく、帯広市民が自分たちで森づくりをしているのだという「市民参加の取組」として評価されるようになりました。

表彰式は、昭和59年6月9日、朝日新聞東京本社2階の朝日ホールで行われ、棚瀬善一実行委員長と飯島誠副委員長が出席しました。この年は、全国から推薦・応募のあった57団体と個人64人、計121件の中から審査の結果5団体と4人が決定しました。表彰は、「自然保護」「森づくり」「環境緑化」の3部門で行われ、実行委員会は環境緑化部門の優秀賞を受賞しました。

この時、副賞として100万円が実行委員会に与えられました。実行委員会では、このお金を帯広の森の造成に役立ててもらうため市に寄附することとしましたが、当時はまだ帯広の森基金ができていませんでした。このことが発端となって帯広市は緑化のための基金を設立することにしました。

(4) 都市緑化及び都市公園保全美化運動における都市緑化功労者の建設大臣表彰

昭和61年、建設省は、都市緑化の推進及び都市公園の設置・保全・美化に関し、特に著しい功績のあった民間等の団体又は個人に対する表彰を行うこととしました。

森の少年隊は、昭和52年に設立されてから毎年の活動として「市民植樹祭」「ドングリ拾い」による森づくりと昭和59年からは河川緑地での「桜並木造成と管理」を続けていました。これらの実績により推薦された結果、「都市緑化又は都市公園事業の推進に顕著な功績のあった団体」として建設大臣表彰を受けることになりました。

表彰式は、昭和61年10月17日東京の日比谷公会堂で行われ、森の少年隊の代表として滝本有香さん（豊成小学校6年、当時）が出席しました。この時表彰されたのは、「清掃美化部門」「施設・用地提供部門」「民有地の緑化・保全部門」「緑化等事業推進部門」の4部門で44団体、個人31人の75件でした。北海道からは森の少年隊だけが表彰を受けました。

(5) 都市景観大賞

都市景観大賞は、都市空間の構成並びに意匠についての総合的な工夫、配慮及びその結果作られてきている都市空間のデザインに着目し、総体としての都市環境が優れた地区並びに高い水準の都市空間デザインが

行われている地区を広く募集し、これらを表彰することによりさらに良好な都市空間が創出されていくことを目的とし、「都市景観の日」実行委員会の主催により創設されました。

平成5年度は、「都市景観100選部門」「景観形成事例部門（地区レベル）（小空間レベル）」の2部門3区分でそれぞれの区分ごとに10地区が選ばれました。帯広市は、帯広の森地区が優れた都市景観を形成しているとして「都市景観100選部門」で建設大臣賞を受賞しました。

表彰式は、平成5年10月4日、東京の日比谷公会堂での第4回「都市景観の日」の行事として行われ、帯広市からは佐々木収入役が出席し、表彰を受けました。



緑化推進功労者
内閣総理大臣表彰



緑の都市賞



朝日森林文化賞

